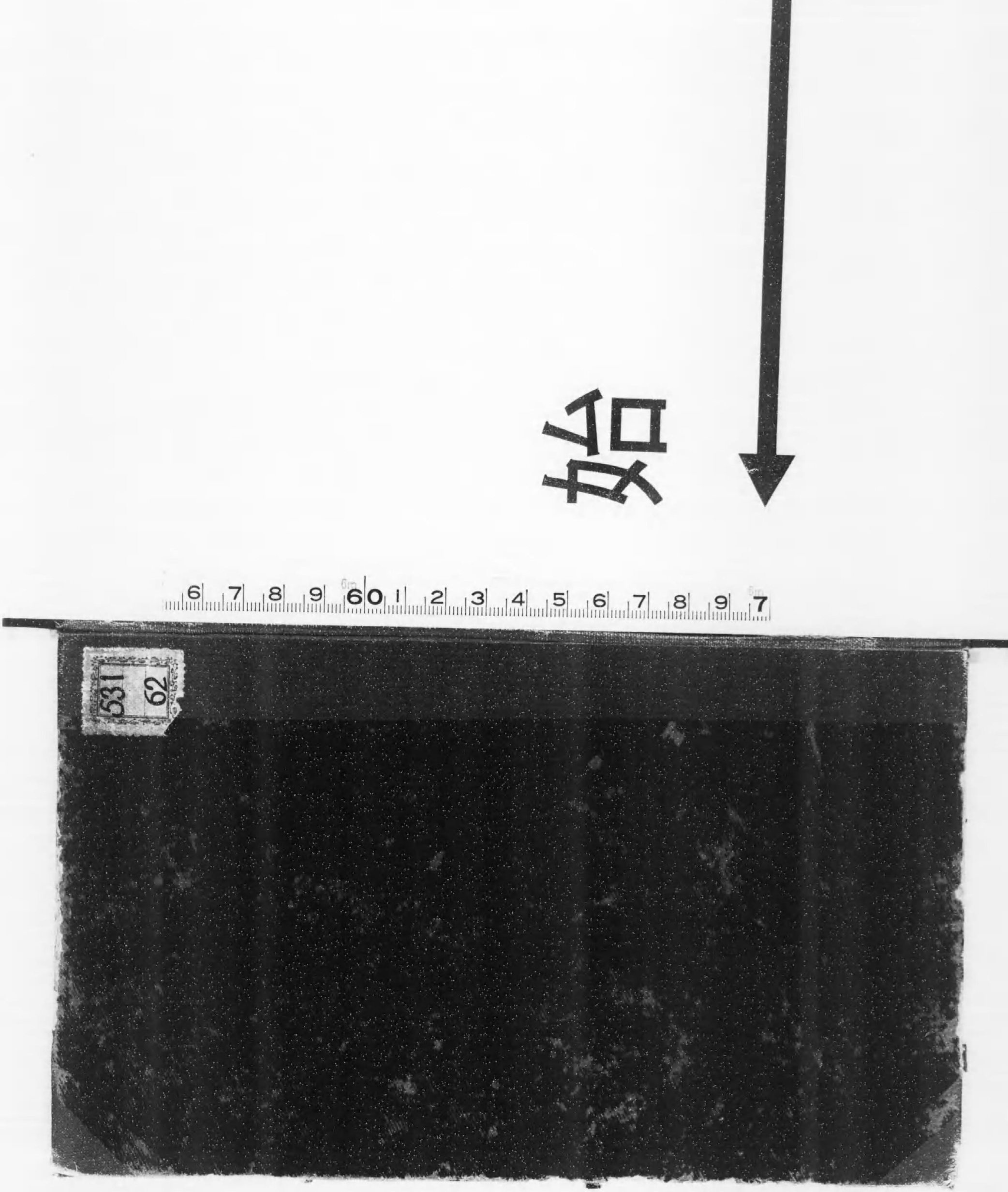

531
62

2.9.2

聊齋志異

大正
15. 6 2
内交

柴田天馬譯
第一書房刊行

531-62

序

若し「支那の稗史小説の類で、最も多く讀まるゝは何か」と問ふ人があつたなら、予は「聊齋誌異」と答ふるに躊躇せぬ。實にこの書ほど面白く、この書ほど文章が立派で、この書ほど讀みあかぬものは無い。呂湛恩先生が「初は聊齋誌異あるを知らず、其後之を聞て喜べるも、又讀むを得ざるを憾とす、長ずるに及んで之を讀むに神興相迎へて之を引くあるが若く、幾んど啜を忘れ枕を廢するに至れり、噫亦癖せり矣」といひ三年もかゝつて「聊齋志異註」を著したのも當然のことである。文學を解するほどの支那人が「聊齋、聊齋」というて此書を愛讀するも當然のことである。

しかし、此樣な名著を遺した柳泉居士蒲松齡先生の運命は甚だ數奇で、生涯を荒山僻隘の鄉に送り、この書を出版する費用さへ無かつた。先生は淄川の人で字を留仙と

いひ幼い時から才學倶に俊れ、康熙辛卯の歳貢となつて後は專ら力を告文に注ぎ、自ら一家を成すに至つたのであるが、名義を重んじ時流に媚びなんだため、片田舍の先生で不遇な生涯を送つたのである。

聊齋誌異全部十六卷四百四十六篇は悉く鬼、狐、仙、怪を誌したもので、何うしてこの樣に不思議なことがこの樣に多く集まつたかと疑はれるが、先生の自序に「人の鬼を談ずるを喜び、聞けば則ち筆に命じ、遂に以て編を成す、之を久ふして四方の同人又郵筒を以て相寄す」とあるので見ると、先生の趣味と、先生の靈筆と、歳月の久しきを以てしてこの書が成つたことが首肯かれる。

王郁雲氏の「聊齋誌異書後」の叙にいふ「鴻篇鉅製、嬉笑怒罵、點醒癡迷のところ悉く誨淫の作ならずして鏤花刻月淫私に渉る者も亦復た尠からず」と、予は淫私に渉るの甚しきものや、餘りに短いものやを除き、聊齋誌異の代表的作品のみを譯出してこの數十篇を得たのであるから、この譯本を讀めば「聊齋を讀み了した」といつて差支へないと斷言する。

予はこの書を譯するに當つて、原文を殆んど其儘直譯した、そうして振假名を利用して出來るだけの意譯を試みた、それが爲め、絢爛目を奪ふが如き原文を、或は生硬蠟を嚼む如きものとしたかも知れぬ、しかしそこに予の苦心が存することをも諒とせられたいものである。

大連の寓居に於て

柴田天馬

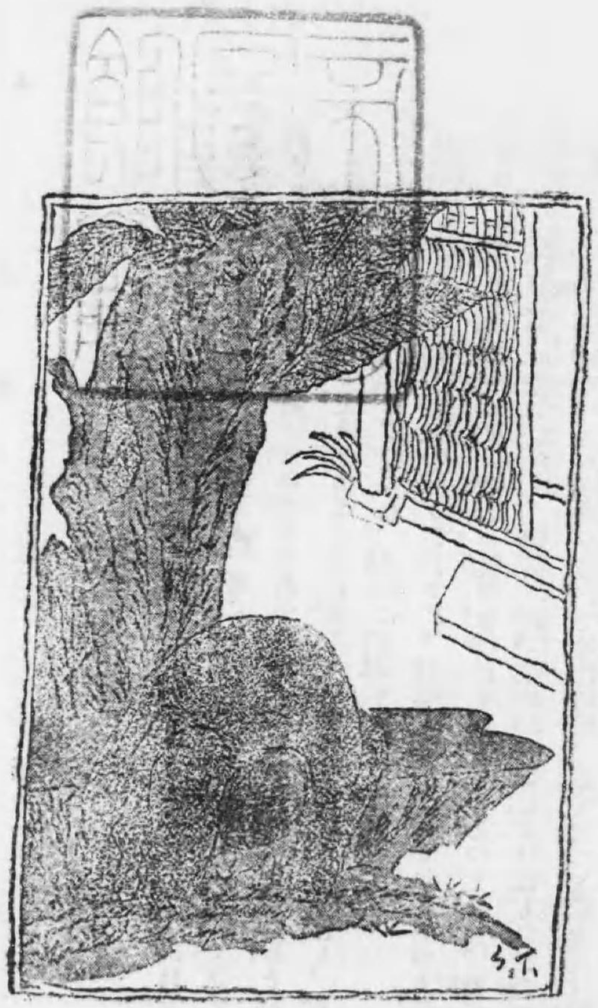
和譯聊齋志異目次

王成……一一
成仙……一六
陸判……三〇
俠女……四五
瞳人語……六一
聶小倩……六六
阿寶……八五
竹青……九六
嬰寧……一〇五

目次

嘉平公子……一三〇
阿纖……一三六
瑞雲……一四八
五通……一五六
黃英……一六七
石清虛……一八一
珊瑚……一八八
姊妹易嫁……二〇五
青蛙神……二一四
陸押官……二二五
鳳仙……二三一

宦娘……二四八
白于玉……二六〇
劉海石……二七七
種梨……二八四
阿英……二八六
畫壁……三〇二
狐嫁女……三〇八
葛巾……三一六
宮夢弼……三三四
小二……三四七
水莽草……三五八



和譯

聊齋志異

目次

魯公女……三六七
顏氏……三七九
蛇人……三八七

王成

王成は平原の舊家の子孫であつたが、最く懶な性であつたから生涯日落れて、遂には唯數間の破家を賃すばかりとなつた、女房と一緒に牛衣の中に臥るやうな始末なので、女房の交誚は一方でなかつた。時に燠熱い夏の盛りであつたが、故くから村にあつた周といふ人の庭園が、今では牆は破れ宇は傾き見る影もなく荒れ果て、一つの亭だけ存つて居る、其處が冷しいといふので村の人達が澤山宿りに行つた、其中に王成も雜つて居た。

既曉ると睡て居た連中は盡く去つて了つた、王成は紅日三竿てからやつと起き、逡巡しながら歸らうと思ふと、道傍の草の根に一股の金釵がキラ〳〵と光つて居た、拾つてつく〴〵視ると細字で「儀賓府造」と鐫つてある、王成の祖に衡府の儀賓となつたものがあつて、故くから持ち傳へたものには大概斯ういふ款式が付いて居たの因、釵を把つて躊躇して居る欵、一人の嫗が來て、

「若しや此處らに金の釵が落ちては居なかつたかエ」

と尋ねた、王成貧乏はして居るが介な性であるから、遽に出して嫗に授すと、嫗は大層喜んで王成の德を贊め、

「此の釵は幾らいくらかゝつたので全く先夫の遺澤で出來たのだ」

と語つた。

「先夫とおつしやるのは伊誰です」

と尋ねると、故の儀賓王束之だと答へた、王成驚いて、

「それは私の祖です、何うしてマア遇つたんでせう」

といふと、嫗も驚いて、

「汝が王束之の子孫なのかエ、我は狐仙で、今から百年前おまへの祖と縁綣になつたが、お前の祖が歿なられてからは老身も遂に身を隱くして了つたのである、過まつて此に釵を落し夫がお前の手に入るといふのは天數ぢやないかネー」

と嘆息した、王成は曾て祖に狐妻があつたといふことを聞いて居たので嫗の言葉を信じ、

「どうぞ私の處へ臨顧ください」

と嫗を邀へると、嫗も王成の言葉に從つて破屋に來てくれた、そこで女房を呼んで嫗に逢はしたが、女房は敝れた衣に蓬の如く亂れた首をして、營養不良の黯い菜色をして居た、嫗は、

「嗚王束之の子孫ともあらうものが一貧至此したのか」

と嘆息し又竈に煙を上げる樣子もないのを見、

「家計が斯んなになつて何うして謀生のだエ」

と尋ねた、そこで女房が細かに貧乏の狀を話して涙に咽ぶと、嫗も共に涙に暮れ、金の釵を女房に渡し質に入れさして米を買はした、さうして、

「三日の後に復來るから」

といつて出て行かうとするのを、王成が挽留めると、

「汝はたつた一人の女房とすら存活て行くことが出來ないではないか、私が一緒に居て仰屋而居したところで何の益があらう」

といつて遂く出ていつて了つた、それから王成が女房に向ひ故を話すと女房は、

「オヤ狐なんですか」

と大に怖がつたが、王成が嫗の義氣を說き聞かし、さう怖がらずに姑と思うて事へなければならないと訓したので、女房も怖はゞながら承知した。

踰て三日目に嫗は果してやつて來た、そして數枚の金を出して粟と麥とを一石づゝ糴はせ、夜になると小さな女房の榻に上つて一緒に臥つた、女房は最初こそ懼れたが、嫗が零々で臭れる樣子が察つたので、遂には少しも疑ひ懼れぬやうになつた、さて翌日になると嫗は王成に向ひ、

「孫よ、惰けて居てはいけないよ、小生業でもやつて見たら何うだエ、いつまでも座食をしてはだめぢやないかネ」といつた、王成が、

「貲が無いから何も出來ませんヨ」

と返事をすると、

「さうかエ、汝の祖が生きて居られた時分には金帛憑所取だつたが、我は世外人の身だからそんな物を欲しいとも思はず、花粉之金として四十兩だけ積へて置いたのが至今猶存つて居る、

どうせ久貯ても用のない金だから、その金を持つて葛布を市つて刻日都に赴つたら微しは息があるだらうヨ」

といふので、王成は嫗の言葉に從つて早速五十餘端の葛布を買つて來た、昔の事だから北京へ行くのに六七箇月もかゝる、嫗は旅の裝を急がせながら囑した。

「勤めなさい懶けなさるなヨ、急ぎなさい、緩しなさるなヨ、一日でも遲くなると後悔しても已晩いヨ」

王成は敬しんで諾し貨を囊に入れて就路たのであるが、途中で雨に遇つて衣も履も浸濡れになつて了つた、王成は平生風霜を不厭いから委頓不堪て、暫く旅舍で休んで居た、雨は淙々と暮れ方まで降り徹き簷には繩の如な大きな雨だれが懸つて居る、止むを得ず一宿して朝になつたが泥濘益甚しく、往來の行人は淖みを踐んで脛を沒するといふ有樣であつた、王成これに畏れを爲し停午まで待つて居ると始漸道は燥いたが、而も陰雲復び合し雨又大に作るといふ次第なので、止むを得ず信宿つて乃行けた、北京に近づいて葛の價が翔貴つたと傳聞し心竊喜で都に入り、先づ客店に解裝した、すると客店の主人は深く王成の晩かつたことを惜しんだ、

といふのは是より以前に南方の往來がやつと始まつたばかりで葛が至つて少なかつたから、北京中の巨きな室で澤山に購ひ込んだ、價も常に較べると三倍ぐらゐに昂つて了つた、ところが王成の著く一日前に葛が雲集いたので、價が頓貶ちたから後から葛を持つて來た連中は一方ならず失望した、と主人から話されたので王成すつかり鬱々不得志、そして日を經るまゝに葛が愈々澪山到著する、價が益々下落するばかりであるが王成は利が無いからといふので售らずに居た、其中に十日ほどは忽ちに過ぎて了つた、客店の食耗はだん〳〵繁多み、倍す憂悶を益すばかりである、見かねて客店の主人が、

「賤く鬻つて了つて改めて外の圖をつけたらいゝでせう」

と勸めて呉れた、その言葉に從つて投げ賣りにすると十兩餘りの虧賃となつた、併し仕方がないと斷念めて翌朝は早く起き、歸らうと思つて囊中を啓けて見ると、サア大變！金がない！驚いて客店の主人にさう告つて見たが、主人とても爲計ことも出來ない、或人が鳴官へて主人に償はせたらいゝだらうと勸めたが王成は嘆息し、

「イヤこれは自分の命數である、主人に何の尤があらう」

といつて應じなかつた、此言を主人が聞いて大に王成を德とし金を五兩呉れてこれを旅費にしてお歸りなさいと親切に慰めてくれた、けれど念へて見ると歸つて祖母に合す面目もない、全く蹀躞内外進退維谷ハメに落ちたのだ、一日適鶉を鬪はして居るのを見ると一遍に數千文の錢を賭けて大變な人氣である、從つて一匹の鶉でも百文では市へぬといふ有樣だつた、王成これを見て意を動かし、籠中を見ると僅々鶉の販賣が出來さうである、そこで此事を客店の主人に商すると、主人も、

「それはいゝ急始めなさい」と慫慂めたうへ、「假寓も飲食も不取其直」

といつてくれた、王成喜んで鶉を盈擄賜ひ込んで歸つて來て主人に見せると主人も喜んで景氣をつけ、速く售れるやうにと祝つて呉れた、ところが夜になると大變な雨で曙まで降り徹し天明て見ると衢は河のやうな水である、而かも淋零は猶ほ、數日降り連綿て更に休止ない、起つて籠の中の鶉を見ると漸と死んで行く、王成大に懼したが何うすることも出來なかつた、日を越るまゝに益々澤山死んで了つて僅かに數頭を餘すのみとなつたから、一籠に集めて置いて翌日見に往くと唯一匹だけ存つて居た、因主人に斯々であると話しをして不覺涕を流すと、

同情のある主人は、

「何といふ不仕合せなお方であらう」

と王成の爲めに扼腕して口惜しがつた、そして王成が、

「金は無くなつたしモウ此上は死んで了ふより外に道はない」

といふのを慰めて、共に生き殘つた鶉を視に往つたが、主人は審諦て、

「此れは似英物だぜ、外の鶉の死んだのは此が殺したのかも知んヨ、どうせ君も暇なんだから、こいつでやつて見たまへ、そして如し良かつたら、賭をしても謀生していけるよ」といつた、そこで王成は主人の教へるとほりにして一匹の鶉を飼ひ馴らした、主人が街頭で酒や肉を賭けてやつて見ると鶉は果して甚く健いもので忽ちに贏を博した、主人は大喜びで王成に金を授し、又若いものと賭を決つたが、三戰三勝、向ふ所敵なしであつた、斯くて半年許りの間に二十金を積み蓄へたので心益々慰み、鶉を視ること命の如くであつた、是より先のこと某といふ非常に鶉好きの王があつて、毎年上元の節になると民間の鶉持ちを呼び集め、鶉を鬪はせるのを道樂にして居た、それで客店の主人が王成に向ひ、

「大した財産が立ろに出來ることがある、實に君の運命ほど分らんものはないネ」
と云つて故を話し、共に某王の邸へ出かけた、主人は途々囑した、
「脱敗たつて喪氣して歸へるばかりサ、倘し萬に一君の鶏が勝つたら王が必市うといふに相違がない、其時君が應してはいけないよ、如王が固て賣れといつたら、僕の首を嚙て居たまへ、そして僕が首を竪に振つてから返辭をしたまへ」
「よしさうしやう」
相談が一決して二人は王の邸へ至た、鶏を持つた連中は堰下で肩摩つて居る、頃之て、王が御殿に出られると、左右の近侍が一同に向つて、
「鶏を鬪はせたいと存ずる者は階段を登つて參れ！」
と聲をかけた、一人の男が鶏を持つて進み出た、王が近侍に命じて王の鶏を放たせた、男も連れて來た鶏を放つ、略一騰踔したかと思ふと、男の鶏は已敗て居た、王は大う笑つて御機嫌甚だ麗はしい、俄頃の間に階上を登つて敗たものが數人に及んだ、此時まで樣子を見て居た客店の主人モウ可い時分と王成と一緒に階上に登つた、王が王成の鶏をつく〴〵と御覽になつて、

「フム、晴に怒脈があるのは健羽の證據で、これは輕々しく敵すべきでない、誰かある鐵喙を持て」
と命ずると早速鐵の樣な喙を持つた鶏を出して王成の鶏に當らした、一再騰踔たかと思ふ間に王の鶏は羽が鍛少なくなつてしまつた、更に良いのを選んで易へて見たが二度とも敗けて了つた、王が、
「急いで宮中の玉鶏を持て」
と命ぜられると、片時して把出したのは鷺のやうな眞素な羽で、けに神駿不凡ものであつた
王成此鶏を見て意餒て了ひ、跪て中止を願つた。
「大王の鶏は神物ですから吾の禽を傷め吾の業を喪はせるだらうと存じます」
王は笑つて、
「イヤ放之て見よ、もし其方のが脱鬪て死んだら厚に償うて取らせるぞ」
と云はれた、王成乃安心して鶏を放つた、王の鶏は直ちに王成の鶏に向つて飛びかゝつた、王成の鶏は怒鷄の如な風で待ち受けて居る、玉鶏が健な喙で衝て來れば王成の鶏は鶴の翔

るが如き態度で之れを撃つ、進退頡頏や、一時ほど闘つたが、玉鶏は漸〳〵懈れて來ると共に益す怒りをなし、益々怒りをなすと共に益々闘ひを急ぎ、未幾すると雪のやうな毛が搖落ちて翅を垂れて逃げて了つた、此體を觀た數千の見物はヤンヤ〳〵とばかり羨やまぬ者はなかつた、

王は王成の鶏を親しく手に把り喙から爪先に至るまで審周一過れ、王成に、

「どうぢや此鶏は貸ぬかナ」

と問はれた、王成答へて

「小人は恒産が無いのですから此鶏に依つて命を繋いで居るので御座いますヘイ、借りたいとは思ひませんので」

といふと、

「重な直を賜る、中人の資産を取らせるが賞りたいとは思はんかノ」

王成良久しく俯むいて思へたすゑ、

「本々いつまでも斯うして居やうとは思ひませんのです、大王が此鶏をお愛しになりますのなら小人に衣食の出來るだけのことをして頂けば外に何も希望はありません」

と答へた。

王「ではいくら欲しいと申すのぢや」

「ハイ千兩頂戴致したいのです」

王は笑つて曰はれた、

「癡男子、此れは如何なる珍寶で千兩も致すのぢや」

「ヘイ大王は寶と思はれないか知れませんが臣は連城の璧も之には過ぎぬと思つて居るのでムいます」

王「それは如何いふ譯ぢや」

「ハイ小人は此鶏を持つて町に參りまして毎日數金を得、それを粟に易へ一家十餘人が無凍餒憂でムいます。實に如何なる寶も之れには如くまいと存じまする」

王が言はれた、

「自分は不相虧のではない、便二百金取らせう」

王成は首を搖つた、又百金を增された、王成横目で主人を見たが、主人が色不動で居るから

「大王の命ですが、請ぞ百代はよして戴きたいと存じます」

王「休矣、誰れが九百兩も出して一匹の鶉を買はうぞ」

王成は鶉を囊に入れてさつさと出て行かうとした、王は忙て、

「鶉人來れ、鶉人來れ、では六百兩を遣はさう、肯なら售つて行け、否ならば已るまで耳」

王成は又主人を見た、主人は依然として自若して居る、けれども王成は心願盈溢なので機會を失ひはせぬかと思ひ、

「ハイ仰の如く售りませう」

王は喜んで卽時に金を秤つて王成に遣はされた、王成金を囊に入れお禮を申上げて外へ出ると主人が默んで、

「僕は初め子に何といつたか、子が自分で急躁いで了つたんだ再少斬之て居れば八百兩は在掌中矣だのに」

といつた、王成は歸つてから金を案の上にぶちまけ主人に思ふだけ取りたまへといつたが主人は固く辭退して受取らず、そんなら食料だけ貰はうといつて計算の上受取つた、王成は旅裝

を整へて家に歸り、悉しく成り行きを話し金を取り出して皆んなで慶び合つた、そこで嫗は良田三百畝を買はせ起屋て作器くり、居然世家とはなつた、そして朝は早くから起き王成には農作を監督させ女房には機織りに氣を付けさせ、少しでも惰ければ八釜しく詞りつけたが、夫婦とも少しも怨む景色もなく精を出したので、三年程たつたら益々富裕な暮しとなつた、一日嫗が歸ると云ひだしたので夫婦は驚いて涙を流して挽きとめた、嫗はそんならといつて止つたが旭日候之と已沓て居た。

(一)前漢の王章が諸生であつたとき非常に貧乏をして妻と共に牛衣の中に臥して居た、後ち出世をしたが氣に入らぬ事があつたので上奏文を奉らうとしたら細君が止めて、貴君牛衣の中で寢たときの事を忘れたんですかといつた、牛衣は亂麻を編んで作つたものである。

(二)詩經の邶風に室人交も偏へに我を讒むとある、茲では、貴君睚眥の拂ひをどうするんですなぞと八釜しくいふことである。

(三)紅日三竿は竿を三本ついだ位に日が上つたことである。

(四)公主卽ち皇女の婿君を駙馬と云ひ以下の婿君を儀賓といふ。

(五)詩經の衞風に首飛蓬の如しとある。

（六）饑て菜を食ふと顏色が黑ろくなるそれを菜色といふのである不景氣な色サネ。
（七）一晩泊りを宿といひ二晩泊るのを信宿といふ。
（八）左思蜀都の賦に鳥鍬羽すとある鍬は殘である。
（九）前漢の文帝が露臺を作らうと思ひ工匠を召して問はれたら百金かゝりますと申上げた、すると帝が百金は中人の產であるといつておやめになつた。
（十）趙に名玉があつたのを秦の昭王が十五城と交換しやうと云はれたので之れを連城の璧といつた。

成仙

文登の周生は少い時から成生と共筆硯で杵臼交であつたが、成は貧乏であつたから、終歲常周の世話を受け、周の方が以齒爲長なので其妻を嫂さんと呼つて大事にし、節序には登堂きて一家の如くに親んで居た、ところが周の妻は子供を生んだ後ち暴かに卒で了つた、其繼に王氏を聘れた、勿論成は兄弟のやうな間柄だから早速喜びに來る筈であるが、少し故があつて王氏には逢はずに居た。

一日のことである、王氏の弟が姉さんを省に來たので內室で宴をして居るところへ適くり成がやつて來た、家人が斯くと通白いだから周は喜んで邀へさせたが、成は失禮だからといふので入らずに辭去しまつた、周は席を外舍に移して成を追かけ、一緒に還つて來て座に就いたところへ人が來て、

「只今別業の僕が邑の宰に捕まつて重く笞たれて居ります」

と白ひた、先是黃といふ吏部の役人の牧傭が牛を牽ぱつて周の田を牛蹊し周の僕と相詬をした、さうして云々と主人に告げ僕を捉へて官に送つて了つた、周は詰得其故て大う怒り、

「黃の牧猪奴、何敢爾したナ、先世は僕の大父の服役であつた癖に少し促得志たと思つて人も無けな振舞をする」

と氣塡胸臆忿て起ち上がつた、さうして黃の家に押かけようとした、成は捺止めて、

「マア待ちたまへ、（三）强梁の世に皂い白いはないのである、況や今日の官宰は半ば强寇で、刀や弓矢をひねくり廻はさない者はないのだ」

といつたが、周生なか〳〵不聽い、けれど成生が再三諫めて泣をさへ流しだので、周も思ひ

止まることは止まつたが、腹の立たのは直らない、其夜はよくも寢ず轉側しながら旦に達た、そこで家人を呼んで、

「黄は我を欺にした仇敵である、併し姑置之して、邑令は朝廷の官で勢力家の官ではないのである、縱へ爭ふ者があつても其兩造を調ぶべき筈だのに、嫉けられた狗のやうに片方ばかりを責めるのは何であるか、よし！　我も牧傭の事を訴へて、邑宰が何ういふ處分をするか見てやる」

と、大した劍幕のところへ家人がおやりなさいと慫慂たので、遂う訴狀を持つて邑宰の所へ出かけていつた、すると宰が訴狀を裂いて地に擲つたので周生は大怒り言葉を極めて宰を罵つた、宰は且慙ぢ且恚り、周生をふん縛つて牢屋の中へ打込んだ。

成生は時過ぎて再び周を尋ね、茲に始めて周が城内へ訴へにいつたことを知つた、驚いて急奔したけれど其時には周はもう囹圄の中に在つたのである、足ずりして悔んだけれど無所爲計つた、時に三人の海寇を獲たので宰は黄賂をやつて彼等に囑つけ、周の同黨であると揑り言を云はせ、周の頂衣を剝ぎ取つて慘酷に榜掠した、成は獄に入つて周に遭ひ相顧みて悽酸に堪へ

なかつたのであるが、此上は叩闕を謀るより外はないと相談すると、周がいふには、

「自分は今や重犴に繫がれて鳥が籠に入れられたやうなものであるし、弟は居るけれどたゞ囚飯をするぐらゐなことしか出來ないのである」

成は鋭身として、

「これ實に僕の爲すべき責任である、困難でも急ならざれば何で友人を必要としやう」

といつて周に別れた、そして叩闕の爲めに出發した、周の弟が贐をしやうと思つて來た時には、モウ出かけてから時を經て居たのであつた。

成は都に著いた、けれど控へる傳手が無い、困つて居ると天子が獵にお出になるといふ噂があつた、そこで木市の材木の蔭に隱れて天子のお過りを待ち受け、お馬車の前に伏舞て哀み號んだ、さうして遂に得准になり自分は手續を經て下げられた、事件は夫々の調べを經て上奏されたが、其間に十月許りも閲つたから周は無實の罪に服して辟を定められるところであつた、所が法院では御批に接して大に駭ろき再び讞を調べるといふことゝなつた、黄は非常に怖れ、周を殺さうと思つて監者に賄賂を送り飲食を絶つて了つた、周の弟が差入物などを持つて來て

も苦く禁じて入れぬやうにしたのである、それで成が法院に赴つて盡力し審問を始めてもらつたときには、業已飢餓のために起つことが出來ないやうな始末であつたので、法院長は怒つて監者を杖斃させやうとした、黄は怖れて數千金を送り何うか監獄を免してくれと運動した、以是膝臚題免でしまつた、宰は法を枉げて監者を流刑に處したのである、勿論周は放免となつて家に歸つたが、是より益す成と肝膽相照すの仲とはなつた。

成はこの訟繫以來世間に對する執着の情が盡く灰となり、周と一緒に世の中から隱れやうと思つたけれど周は少い婦に溺れて居たので成の勸めを迂といつて一笑に付して了つた、成は再びは言はなかつた、而かも其意は甚と決まつて居たのであつた。

別れてから幾日か過ぎたけれど、成は來なかつた、使をやつて成の家を見させると、成の家では周の所に居るのだらうと思つて居た、兩方に居ないのだから一同始めて疑ひを生じた、周は扨こそと心の異つたことのあるのを知り、人をやつて天下の寺觀竪谷殆んど至らぬ隈もなく成の踪跡を搜ぐらした、又時には成の子に金帛を送つてやつたりなぞした。

八九年してから成が忽然と自分でやつて來た、見れば黄巾鬼服、岸然として懸崖の聳え立

つたやうな道士の貌である、周は大に喜び臂を把つて曰つた、

「君は何處へ往つたんだ、ひどく僕を搜さしたネ」

成は笑つて、

「イヤ孤雲の如く野鶴の如く、定つた棲所もない、併し別れて後幸ひに頑健であるヨ」

周は酒肴の支度をさせて其の後の話などしつゝ、道士の服裝を變へさせやうとしたが、成は笑つて應じない、そこで周が、

「愚だ哉、君は何故敝屣のやうに妻子眷族を捨てたんだ」

といふと成は笑ひながら、

「イヤ不然、人が僕を捨てやうと思つても誰れが棄てることが能るか」

といふ。

「何處に棲んでゐるのか」

と問と、

「勞山の上清宮に居るんだ」

と答へる、さうかうする中に夜になつたので竝んで寢たが、夢に成が裸になり胸の上に伏しかゝつて氣不能息いのので何爲るんだと問ても特と返辭をしない、忽、驚いて眼が寤た、成は何うしたらうと思つて呼んで見るが應がない、座つて索つて見ても杳然として何處へ往つたか分らない、移時してから自分が成の榻で寢て居るのに氣が著き駭いて云つた、

「ハテ昨夜はそんなに醉つても居なかつたのに、何うして此なに顚倒たんだらう」

乃家人を呼ぶ、家人が火を點すと、豈圖らんや儼然たる成の姿である、一體周は髭の多い質であつたが、手で撫でて見ると疎らなやつが幾莖もない、鏡を取つて顏を寫し、

「オヤ、此に成生が居る、ハテ自分は何處へいつたんだらう」

と訝つた、併し忽ち、

「これは成が術をつかつて自分を世の中から隱遁させやうとしたんだナ」

と氣がついた、そして奥へ行かうと思つて入りかけたが、顏が逆つて居るので弟が通さない、周は自分で自分を證明することが出來ないから僕と馬とを命け成を搜しに出かけた、數日を經て勞山に入ると馬が急にどん〳〵駛け出して僕を振り捨て一本の樹の下でやつと止つた、見る

と羽客の往來する者が澤山居た、其中の一道士が周を見たので、成といふ道士は何處に居るのでせうと尋ねた、道士は笑ひながら、

「名前は聞き及んで居ます、何でも上清宮に居るさうですヨ」

と言つて遲ちに去つた、さうして一矢之外で向ふから來る人と何やら話しをして去つて了つた、やがて向ふから來る人に行き逢ふと意外にも其人は同窓の友であつた、周を見て愕いていふには、

「數年晤はなかつたネ、人の話しでは君は名山に入つて道を學んで居るといふことだつたが、今尙人間の仲間に居たのかネ」

周は變なことをいふ哩とは思つたけれど今迄の異なことを悉しく述べた、同窓の友は驚いて、

「ヤ、僕は今適出逢つたんだ、さうして君だと思つたんだ、去つてから間がないから未だ遠くは行かんだらう」

周は益す異に思ひ、

「そんなら僕も逢つたんだ、自分の顏をした人に逢つて夫れが分らんとは怪しい哉」

と云つて居るうちに僕が追ついたので急に駛けていつたが竟に蹤兆も分らなかつた。

一望ば窒闊としたところで進退難自主い、併し歸らうと思つても自分を迎へる家は無いのだから、何處までも成生を窮追めやうと決意した、其中に山はだん〳〵怪險になつて馬に騎ることが出來なくなつた、遂に周は馬を僕に付し自分は迤邐づた山道を歩んで往つた、すると遙に一人の僮が唯獨り座つて居た、趨り近づいて程を問ひ且つ告以故すと、僮が、

「私は成先生の弟子でございますから」

といつて周に代つて衣糧を荷ひ、導をして俱に行つた、星飯き露宿つて遠行殊遠と歩ゆみ三日目に始めて至た、併しそれは世の所謂上清宮ではなかつた、時に十月であつた、山花路に滿ち冬の初のやうではなかつた。

僮が内に入つて、

「お客樣がお出になりました」

と報せると成が出て來て己の形を認め、手を執つて中へ入つた、さうして酒を出して談語をはじめた、異彩之禽で其聲笙簧のやうなやつが、人に馴れて驚かず、そして時々は座上に飛んで來ては鳴いて居る、甚く異だとは思ひながら、俗の念が切であつて流連もるやうといふやうな考へが少しもなかつた。

地下には蒲團が二つあつた、夫を曳き寄せて生と竝んで座つて居たが、二更後になつていろいろな心が俱り寂まつたと思ふ時、忽ち瞥然一眩んで何だか自分と成と位地が變つたやうな心地がした、疑之つて頷下を撫でると故の如き于思であつた、既曙つて浩然返りたい氣になつたが、成が固く留めるので止を得ず三日を越し成が、

「少し寢たまへ、明日は早く君を送らう」

といふので甫めて交睫つた、そして、

「行裝が已具つたヨ」

といふ成の聲に目を覺まし、成に從づて起つたが、行く所の道は殊ら舊道とは違つて居た、無幾時里居が在望中る、成は路の側らに座つて周に歸れといふ、周は成を連れて行かうとしたけれど强ひ得なかつたので踽踽家に歸つた、さうして門を叩いたが應する者がなかつた、不圖牆を欲越と思ふと身はさながら葉の似に飄へり、一躍に飛び越した、さうして幾重かの垣を踰

えて臥室の外に來ると燈燭が熒然點いて居て内人は未だ寢て居らぬ樣子である、のみならず嘆々誰やらと語して居る樣子である、窓を瑒めて窺いて見ると、妻と一人の剛僕と一緒に酒を飲んで居る、其狀が狎褻しいので怒火如焚になつて執へやうとしたが、又孤の力では勝てないだらうと思つたから、遂に潛身と脱扃て成の居る所へ奔けつけて助けて吳れと賴んだ、成は慨然として諾した、さうして直ちに内寢に抵つた、周が燒糞になつて大きな石で門を搗くと内では甚い張皇かたで中々門を開けやうとはせぬ、愈よ怪しからぬといふ譯で石を以て益々酷く搗く、と益堅く門を閉める、そこで成が劍を拔いて斬付けると劃然と頓ち闢いたから、周は中へ飛び込む、僕は戸を衝いて外へ飛び出す、門外には成が待つて居て飛出した奴を腕の付け根から斬り落して了つた、其間に周は妻を執へて酷く拷訊ひ、自分の牢に被收た時から僕と私通したといふことが判つたので、成の劍を借りて首を決り、腸を庭の樹に懸けたうへ、成に從て山へ迯つた。

と、慕然忽眼が醒めた、自分は矢張り臥榻の上に横つて居るのである、驚いて、

「樣々な怪夢を見た、ア、駭懼た」

といふと成は笑つて、

「卿は夢を眞だと思ひ眞の事を夢だと思つて居るんだネ」

といふ、愕て譯を問くと成は默つて劍を示した、血の痕が生々と存つて居る、周は驚き懼れて氣絶しやうとしたが、竊かに成が術を使つて幻を見せたんだらうとも思つた、成は其意を察し再び旅裝を促し周を送つて歸つて來た、荏苒に里門に至た、乃、曰ふには、

「嘗昔之夜劍に倚つて待つて居たのは此處ではなかつたか、僕は惡濁を見るのが厭であるから還た此で君を待たう、如哺過になつても君が來なかつたら僕は去つて了ふヨ」

周は我が家に歸つて來た、門戸が蕭索として住む人がありとも見えぬ、そこで弟の家に入ると弟は兄を見、涙を流して曰ふた、

「兄が去つた後盜が夜嫂を殺して腸を刳つて去ました、その慘酷さは實に悼ましいことでした、於今官でも捕らんのです」

周は亦夢の醒めたやうな氣持がした、因事情を悉しく話し、もう其事は深くたしかめるなといつて戒めた、弟は兄の話しを聞いて良久しく錯愕たのであつた、で子供は何うしただらうと

周が問ねると、弟は老媼に連れて來さして周に見せた、周がいふには、

「此襁褓物は宗緒所關なんだから弟好く視てやつておくれ兄は人世を辭さうと思ふのである」

云ひ終つて身を起し、徑ちに出て行くのであつた、弟は涕泗ながらに追挽たけれど周は笑つて顧みなかつた、そして野外に來てそこに待つて居る成と一緒に行きながら、遙に頭を回して曰つた、

「忍耐とは最も樂むべき事であるぞ」

で、弟は尙ほ物を言うとすると成が闊い袖を擧げたと見る間に二人の姿は消えて了つた、弟は悵然として移時立つて居たが遂に痛哭して家に歸つた、元來周の弟は至つて朴拙な男で不善治家人生産た、それで數年のうちに益々貧乏になつてしまひ、周の子が長きくなつても師を延ことが能ず、自分で讀書きを敎へるのであつた、一日朝早く書齋に行くと案の頭に敵書がある、固く封をして上に仲氏啓と認めてあるのが正しく兄の手跡であつた、開いて視ると中は虛で、長さが二寸許りの爪が祇一枚入つて居た、變だと思つて其爪を研の上に置き書齋を出て家人に何處から來たのかと尋ねたが、知つて居るものはなかつた、で、書齋に回つて視ると研は粲々

として黃金に化つて居た、驚いて鋼鑕に試して見ると皆な同じく黃金になつて了ふ、それから大層金持ちになり、成の子には澤山の金を分配してやつた、因、世間では兩家に點金術がある と云ひ傳へたさうである。

(一)公汝穆が大學に居たころ資糧が無かつたので、服を變じて吳裕といふ人の爲めに賃臼をやつて居た、所が裕が色々話して見て大變驚き遂に杵臼の間に交りを訂んだといふことが後漢書に出て居る。

(二)左傳に牛を率いて人の田を蹊ぐといふことが書いてある蹊とは徑のことである。

(三)强梁といふ字は莊子の山木篇にも後漢禮儀志にもある、山木篇の場合では强力者のことで禮儀志の場合では鬼を食ふ神の名である玆では勿論强力者のことで夫も惡意を持つて居る。

(四)原被兩造などと今の法書も使つて居るが兩造とは兩爭の皆至ることである。

(五)圄は牢、圉は止である、夏では鈞臺、殷では羑里、周では圄土にあつた、囹圄は秦の獄名である。

(六)韓詩外傳に鄉亭の繫を犴と曰ひ朝廷のを獄といふ、犴は犬のことで犬は能く守るから牢獄のことを犴といふといふことが出て居る。

(七)死罪を大辟といひ刑罪を小辟といふ。

(八)讞とは罪の疑はしきを調べることである。

(九)唐の李播といふ人は官を棄て道士となり黄巾子と稱した、また王褘といふ人は鶴髪な者て居た、それで道士のことを黄巾或は鶴髪の人といふのである。

(十)廬山記に唐の保太中道士譚紫霄に號を金門羽客と賜つたといふことがある、羽客とは仙人や道士の意味である。

(十一)于思は髭の多い人のことである。

陸　判

陵陽に朱爾旦字は小明といふ人があつた、豪放な氣象だつたが元來鈍した質であつたから勉強する割には名前を人に知られなかつた。

一日のことで同窓の連中が衆つて一杯やつて居ると或人が朱に向ひ、

「君は豪傑の名があるが、深夜十王殿に赴つて左りの廊下に在る判官の木像を負つて來ることが能たら、皆で君の爲めに酒莚を開くが何うだ」

といつて戲づた、といふのは陵陽に十王殿があつて、生きてるやうに粧飾した恐ろしげな木

像が竝んで居る中で、左りの廊下にある判官は緣の面赤い鬚で容貌獰惡を極め、夜になると兩方の廊下で拷問の聲が聞えることなどあるので、十王殿に入る者は身の毛が森豎くらゐであつた、それで衆がこんなことを言ひ出して朱を難らせやうとしたのである。

朱は笑つて逕に出て行つた、居無何、門外で、

「髯宗師を連れて來たヨ」

と大呼る者があるので、衆が起ち上る程もなく朱が判官の木像を負つて入つて來た、そしてそれを机の上に置き艙をとつて三度奉酬た、一同は木像を見るや否や身體が瑟縮んで座に安んずることが出來ぬので、請負つて歸つて呉れと朱に頼んだ、朱は又酒を把つて地に灌ぎ、

「門生は狂率不文ですから諒不爲怪い、荒舍は此の匪遊です、乘興た時には幸ぞ勿爲畦畛飲みにいらつしやい」

と祝つて負つて去つた。

次日は果して衆で朱を招いて御馳走をした、抵暮半醉きげんで歸つて來たが興未闌ので挑燭して獨りで飲んでると、忽ち簾を搴げて入つて來た人がある、視之則判官だ、朱は起つて、

「噫！僕は殆將死矣！前日威嚴を冒瀆したから加斧鑕に來られたんだ！」

といふと判官は濃い髯の中から微笑して、

「非也、昨日高義なる御約束を蒙むつたので、今夜は偶ま暇があつたから敬んで達人の約を踐んだのです」

といつた、朱は大に悅び衣を牽いて座を促し、自ら起つて器を滌つたり火を熱したりすると判官が、

「天道が溫和だから冷飲で可以ヨ」

といふので、如命に瓶を案の上に置き、家人にさういつて肴果を治させた、すると夫人は大層驚いて座敷に出てはいけませんといつたが朱は聽かない、肴の出來るのを俟ちそれを持つて座敷へ歸り、易琖交酬をしながら姓名を詢ねると、

「僕の姓は陸で名はないヨ」

と答へた、與に古典の談をして見ると應答響の如くである。

「飲藝を知つて居ますか」

と尋ねると、

「妍蠟ぐらゐは辨へてるサ」

といふ。冥司の誦讀は陽世と略ぼ同じやうである。

陸判官中々の豪飲で一擧に十觥を平らけるといふ勢ひだが、朱は竟日飲み通したので遂には玉山の傾頽するを覺えず几に伏して醺睡して了つた。醒めた比には殘んの燭がほの暗く、お客は已に居なかつた。是からといふものは二日目三日目ぐらゐにはやつて來て交情益々親密となり、時には泊つて行くこともあつた。朱が文章などの草稿を見せると陸は之を紅勒して都べて不佳といつた。一夜のことである。朱は醉ぱらつて先きに寢て了ひ陸は獨酌でグビ〳〵やつて居たが、醉夢の中醫腑に微し痛みを覺えたので眼が醒めると、陸判が牀の前に危座つて腔を破ぶり腸胃を取り出して一條一條整理して居る。朱は大に愕き、

「何の仇も怨も無いのに何故僕を殺すんだ」

と尋ねると陸は笑つて、

「勿懼！僕は君の爲めに慧な心と取易へて居るのだ」

といつて從容に腸を入れて皮を合はせ、足を裹む布で朱の腹部から腰のあたりを卷きつけて作用を畢つた。視ると榻の上には血の迹も殘つて居ない。腹のあたりが少し麻木るやうな氣がする。几の上に一片の肉塊が置いてあるのを見て、

「何です」

と尋ねると、

「此は君の心である。君の作文が甘く出來ないのは全く君の毛竅が塞づてゐるためだから、冥間にある千萬の心の中から佳者を一枚揀び出して、君のために取替へたのである」

といつて扉をあけて去つて了つた。天明けてから視ると縫ひ合せた創口は癒合して縫のやうな赤い痕が殘つて居るのみだ。朱は是より文思大に進み眼に觸れたものは忘れないやうになつたので、數日を過ぎて又文章を作り之れを陸に見せると、

「可矣。しかし君は福が薄くて大した顯貴は能ない。(三)鄉科までぢや」

「それは何時だらう」

「今歲は必と魁で及第するだらう」

それから幾もなく豫備試驗で一等になり秋の闈では果して經元で乃第した。同窓の友達は朱か鄉試を受けるなんて飛でもないと揶揄つて居たのであるが、闈墨を見るに及び驚いて譯を尋ね、異なことのあつたのが分つたので、皆は朱に先容を求め陸に交際したいとたのんだ。陸は之を承諾した。そこで一同大に酒席を設けて陸を待つて居ると初更の頃陸がやつて來た。赤い髯を蹙かせ眼は烱々として電のやうである。一同茫然として色を喪ひ齒の根も合はずだん〳〵に歸つて了つた。そこで朱は陸と共に自分の家に歸つて一杯やりながら陸に對つていつた、

「腸を湔ひ胃を伐ぐの賜を受けたことは多とするが尙一事君を煩はしたいことがある。知らず君が承知してくれるや否やを」

陸は答へた、

「どんな事か知らんが請ぞ命けてくれたまへ」

朱はいつた、

「心や腸を取かへることが出來るとすれば、面目も亦換へ得られる譯である。山荆は結髮ときからの夫婦なんだが、下體はそんなに惡くないのだけれど顏は極く佳麗いといふ方でない。そ

れで君に一つ取かへて貰ひたいと思ふんだが、何うだらう」

陸は笑ひながら答へた、

「諾容徐圖之」

と、それから數日の後夜半に陸がやつて來て闕を叩いた。朱は急ぎ起つて陸を迎へ燭をつけた。見ると懐に一物入れて居るやうである。何だと詰ると、

「これは曩や君が囑んだものサ。その時は物色が難かしいと思つたが適ど一美人の首が手に入つたので、敬で君の命を果すのである」

といふ。撥いて見ると頸の血は尙濕ほつて居た。陸は朱を促して、

「急ぐんだヨ君。そして勿驚禽犬かんよ」

と云ひ朱が戸の扃めてあるのに困つて居ると、陸が一手で扉を推した。すると扉は自でに開いて了つた。臥室に入ると夫人は身を側めて眠つて居る。陸は美人の首を朱に抱かして置いて靴の中から匕首のやうな白刃を取出し、夫人の頂に按がつて爪を切るやうに迎刃而解放した。首はコロリと枕の畔に落ちた。急いで朱の抱いて居る美人の頭を取つて夫人の首に詳審端正合

はせ、確かりと捺しつけた後ち枕を肩に當がつた、そして朱に命じて夫人の頭を靜かな所に瘞めさせて歸つて了つた。

朱の妻は眼を醒した、頸の所が微し麻れるやうな氣がする、面頰が甲錯から搓つて見るとベットリと血がついた。驚いて婢を呼んで浣汲を持つて來させた。婢は夫人の面が血狼藉になつてるのを見て驚絶した。濯ふと盆の水はまつ赤になつて、首を擧げると面目が全り非つてゐるので又駭極した。夫人も鏡に照して錯愕いたが自分にはさつぱり解らない。所へ朱が入つて來て譯を話したので反覆細視と月の樣な長い眉、滴るやうな笑靨で全く畫中の人である。領を解いて瞼べて見ると紅い線がグルリを一周して上と下とは肉の色が判然と異つて居た。

是より先、吳侍御に美くしい女があつたが、二度も結婚の約束をして夫に死に分れたので、十九になつても猶未だ醮しなかつた。上元には十王殿に誰も參詣するので、其女も遊びにいつたが、多くの人の中に無賴之賊があつて女の美くしいのを見て陰かに居里を聞いて置き夜に乘じて梯をかけて邸に入つた。そして女の部屋に穴を明け婢の一人を切り殺して女に與淫けと逼つた。女は力一ぱいに拒ぎ聲一ぱいに喊つた。賊は怒つて女をも亦殺した。吳夫人は微かに聞

聲を聞きつけ婢を呼び起して往つて視ると此の始末だから驚いて了つた。擧家皆んな起きて來て堂上に横はつて居る屍骸を見、其傍に落ちて居る美しい頭を見て悉く啼いたのである。さて其夜は終夜騒ぎ廻はり詰旦てから屍骸に著せてある衾を啓けて見ると、體はあるけれども首がない。侍女を悉く撻つたけれども、

「番の致しかたが不恪かつたのです致葬犬腹ことです」

といふばかりである、そこで侍御は郡守に訴へた、郡守は嚴重に賊を搜したが三月經つても手がかりがない。折から朱の家で首が換つたといふ變事を吳公に話したものがあつたので、吳公は變だと思つて媼を見にやつた。媼は朱の夫人を見て吃驚し急いで吳公に斯くと告げた。吳公は女の尸があるのに首だけが生きてるのは不思議だと思つたが、ことによると朱が左道を以て女を殺したのかも知れないと邪獄したので、往ていつて朱を詰つた。すると朱は、

「室人は夢の中に首を取替へられたので實に何故であるか分らぬのです。それを僕が殺したと仰るのは寃罪です」

と辭釋をしたけれど、吳公は信じないで朱を訴へた。郡守は朱の家人を鞫べても朱の言葉の

通りであるから裁決が出來ない。朱は歸つて來て陸に向ひ無事に落著する計はあるまいかと相談した、陸は、

「ナアニ難かしいことはない。死んだ女に言はせればいゝんだ」

と平氣なものである。すると或夜吳公の夢に女が現れて、

「兒は蘇溪の楊大年に殺されたので朱孝廉の知つたことではありません。アノ人は奥さんの美人でないことを氣にして居たので陸判官が兒の頭を取つて取替へてやつたのです。詰り妾の身體は死んでも頭は生きたやうなものなんです。願朱孝廉に迷惑をかけないやうにして下さい」

といつた。醒てから夫人に話すと、夫人の夢も同じであつた。そこで官にさういつて訴へ出た。官で調べて見ると果して楊大年といふものがあつた。執へて責めつけるととう〳〵白狀して罪に伏した。そこで朱の家に詣り夫人にお眼にかゝりたいといつて夫人に逢ひ、そんなことから朱を自分の婿にした。そして朱の妻の首と女の體とを合せ葬つた。其後朱は三度禮闈に應じたけれどもいつも規則に合ないで受驗が出來なかつたので仕官の心がなくなつて了つた。

それから三十年を經た一夕陸が來て、

「君の壽は長いことはないヨ」

といつた。

「いつ迄です」

と問と、

「モウ五日だ」

と對へた。

「助けてくれる譯にはいかんか」

といふと、

「天の命ずる所で人間はこれを如何ともすることは出來ないのである。且達人から觀れば生も死も同じである。生を樂しとすることもなければ死を悲しとすることもない」

朱は成程と思つて衣や棺などを治へ盛裝して沒んだのであつた。翌日夫人が柩に抱まつて哭いて居ると朱が外から冉々やつて來た。夫人が懼がると朱が曰ふには、

「自分は鬼であるが生きてる時と少しも異はないのだ。寡婦になつた爾や孤兒になつた子供のことを思ふと戀々さに堪へずやつて來たのである」

夫人は大そう慟いて涙が膺までも流れた。朱は依々と夫人を慰めた夫人は曰うた、

「還魂といふ古說もあります。貴郎も靈があるのならなぜ再生きて來ないのですか」

朱は曰うた、

「イヤ天の定めた命數には違ふことは出來ないヨ」

夫人は問うた、

「陰司で何を務めてるらつしやるんです」

「陸判官が自分を督案に推薦して吳れて官爵をも授けられ亦無所苦のである」

夫人は又話さうとすると朱がいふには、

「陸さんが自分と一緒に來て居るから可設酒饌い」

夫人は云はれるまゝに營備た。室の中では飲んだり笑つたり、豪氣高辭宛も生前の如くである。夜半になつて見に行くと寂然として居なかつた。是からは三日に一度ぐらゐは來て時には

留宿て行くこともあつた。そして家の事に就ていろ〳〵と經紀つてくれた。息子の緯は方五歳、であつたが來ると提抱てやつたりなどした。七八つになると燈火の下で讀書きを敎へてくれた。緯も亦慧な性で九歳の時には文章を能く作つた。十五で邑庠に入り父の無いといふことを知らなかつた。之からは來るのが漸疎くなつて唯月日の經つまゝであつたが、一夕來て夫人に曰ふには、

「今や卿と永久に訣れる時が來た」

「何へ往しやるのです」

と夫人が問ふ。

「天子の命を承つて大華卿となり遠方へ赴任するのである。事務は煩多であり途は遠く隔てて居るから來ることが出來ないのだ」

夫人と息子は扶て大いに哭いた。すると朱が慰めて、

「イヤ爾なに哭くものではない。兒は已成人し生活には困らぬ筈である。百年も別れずに居る鸞鳳があらうか」

というて子供を顧み、

「立派な人となれヨ。父の遺業を墮すのではないぞ十年後には復一度逢はう」

といつて門を出て了つた。これからは絶えて來なかつた。後緯は二十五のときに進士となり、勅命によつて西岳を祭りにいつたが華陰を通つて行く折柄輿從を連れ羽葆をさしかけ鹵簿を備へて行く人があつた。車中の人を審覗ると父であるから馬を下りて道の邊りに哭き伏して居ると父は輿を停め、

「官聲好いので自分は瞑目して居るぞ」

緯は尙ほ地に伏して起たずに居た。朱は車を促して去つたが數武を距てた時佩びて居た刀を解いて持たせて寄した。さうして遙に、

「此刀を佩びて居れば貴をするであらう」

といつた。緯は追付かうとしたけれど、輿も人馬も飄忽として風の如く瞬息にして見えなくなつた、痛恨良や久しきのち、刀を抽て之を見ると極めて精工なもので、

「膽は大ならんことを欲し心は小ならんことを欲す、智は圓ならんことを欲し行は方ならんこ

とを欲す」

と鐫つてあつた、緯は後司馬となり沈、潛、沕、渾、深といふ五人の子を生んだ、一夕父が夢に現れて刀は渾に贈るがよいというた、其通りにしたら渾は仕へて總憲となり大に評判がよかつたさうである。

(一)魃とは兕牛の角で作つた大きな盃。

(二)世說山濤に嵇叔夜といふ人は巍々として孤松の獨立するが如く其醉ふや玉山の將に頹れんとするが如しとあるところから醉つた人を形容するに用ゐるのである。但し往來に醉倒れて犬に顏を舐められる人などには用ゐぬこと勿論である。

(三)(四)鄉試の及第者で第六位から第十八位までを魁又は鄉魁といふ。

(五)前項及第者中最優等者を解元といひ第二位から第五位までを經魁といふ經元とは第二位のことだらう。

(六)揶揄は手を擧げて相弄するなりと集韻に見ゆ、指さして笑つたりなどすること。

(七)前項の試驗答案は硃と墨とで二通を認め硃の方は無名とし墨の方は記名密封して呈出し試驗委員は硃書によつて點數を定めたのち墨書を開いて姓名を發表する。その墨書が闈墨といふのである。

(八)鄉陽獄中の書に蟠木の根柢輪囷離奇にして萬乘の器たる者は左右を以て先づ之れが容を爲す云々とある容とは形容のことで途に紹介することを先容といふやうになつたのである。

(九)初更は今の午後八時、二更は十時、三更は十二時。

(十)物色とは形や容貌によつて搜すこと。

(十一)漢書に賢を右にし愚を左にし貴を右にし賤を左にすとある、だから正道は右、邪道は左で妖術などは左道なのである。

(十二)鄉試の及第者其他の有資格者に對する試驗を會試といひ禮部で試行するから禮闈ともいふのである。

俠女

顧生は金陵の人で、博く技藝に通じて居た、而も家は素めて貧乏であつた。母親が老つて居たので、其膝下を離れるに忍びず毎日書畫を揮いて贄を受けそれで自給して居たのであつた。二十五であつたが伉儷も猶虛かつた。對戸に舊い空家があつて適一人の老媼さんと少い女とが

稅居してゐたが、男子がないので、わざと誰何もしないで居た。

一日偶と外から歸つて來ると女郎が母さんの房中から出て來た。年は十八九約あらうか、秀蓮として都雅やかで、匹罕な女である。生を見ても甚く避ける風も無かつたが何處やらに凜として近よれぬ所があつた。

生は母さんの房に入つて、

「今の女は誰です」

と問ねた。母さんは、

「アレは對戸の女郎で吾に刀尺を借りに來たのです。女郎の家もやつぱり母さん一人ださうだが話しの樣子では貧しい家に產れた人のやうでは無い。あたしが何うして許嫁を極めないんですと問たら、母さんが老つてますからといつて居た。明日は女郎の母さんに拜つて風く此方の意をいつて見るつもりだがネ。倘むかふの望みが奢くなかつたら兒が女郎に代つて老を養つてあげるがいゝネ」

明日顧生の母さんは對戸に造つて見た。女郎の母さんといふのは寡のお媼さんで、其室には

隔宿の糧もなかつた。

「所業おいでです」

と問ねると、

「女の十指を賴みにして居るのです」

との答へである。徐〻

「同室になつたらどうです」と謀して試た。媼さんは意似納で女に商したが女は默つて居た。意殊不然い。母さんは乃で歸つて詳く狀を話して、

「女子は吾の貧しいのを嫌つて居るのではないかしら、口も不言し笑もしないし桃か李の花の如に鹽だけれど霜か雪の如に冷やかなのは奇な人である」

といつて母子で嘆息した。

一日、生が齋に座つて居ると一人の少年が書を求めに來た。姿容が甚く美しくて頗う意儇佻である。

「何所自きたのだエ?」

と詰くと、

「隣村から」

と對へた。嗣後二三日毎にやつて來る。稍々稔熟くなる。漸々嘲謔をいふ。狎抱へる、拒まない、遂に稔になつた。それからは甚く暱く往來して居たが、あるとき女郎が過るのを少年はジッと目送つて、

「あれは誰です」

と問く。

「隣の女サ」

と顧生が對へる。少年は、

「如此に美麗いのに神情は何たる可畏だらう」

といつた。少間して生が内に入ると母さんが、

「今適女がお米を買ひに來てネ、經日も不舉火といつてたが、あの女はたいそう孝行だのに極く貧乏なのは憫さうなものだ、少し周邨であけるがよい」

といつた。生は母さんの言葉に從つて一斗ばかりの粟を贈つたが別に謝も申なかつた。併し生の家に來て母さんが衣や履なぞを作つてるのを見ると代つて縫紉てくれるし、出入堂中や操作がまるで婦のやうであるから生も德之がつて餌などを餽れることがあれば其都度女の母親に分給てやつた。けれど女は亦不置齒頰かつた。ある時生の母さんが陰部に疽ができて宵旦うんうん苦しんで居ると、女は時々病床を省視ひ毎日三四回は洗つたり藥を敷けたりしてくれた。母さんは、母さんは氣の毒がつたが嬢いのを厭はずによくしてくれる、

「唉！　如兒な新婦の世話になつて死ぬことはできないだらう！」

と曰つて淚に悲哽んだ。女は慰めた、

「郎子が大さう孝行でいらつしやるんですから、私どものやうな寡婦や孤女よりも什百勝か知れませんワ」

母さんは曰つた、

「孝行でも男には床頭蹀躞之役は能ないヨ。且に私は已う向暮で旦夕向露のだから祧續のないのが何よりも憂なのでネ」

言てる間に生が入つて來た。母さんは泣いて曰つた、
「良多娘子のお世話になつて居るのだヨ。汝、報德を忘れてはなりませんヨ」
生は伏して女を拜した。女は曰つた、
「君が我の母を敬にして下さつても我はお謝も申はないではありませんか、それに君は何故そんなに謝をおつしやるんです？」
女の言を聽いて生は益々敬愛した。けれども女の態度は生硬もので毫も干すべきところがなかつた。
一日女が門を出るのにあつたので、生が目を注ぐと女は忽ち回首つて嫣然と笑つた、生は意外なのを喜んで女の家に從ていつて挑んだ。女は拒まなかつた。で遂う情を通じた、女は生を戒めて、
「一どきりですヨ。再はいけませんヨ」
といつたが生は應へずに去つて了つた。翌日生が又挑むと女は色を正して顧もせずに去つて了つた。毎日頻りにやつてくる、時々出遇ふ、けれども不假以詞色い。游戯をしてみるけれど

トンと冷語冰人である。ある時人の居ないところで、
「毎日來る少年は誰です」
と問くので、悉し告すと、
「彼の人は度々妾に無禮なことをするんですが、君の狎暱ですから、置之して居るんです。どうか寄語てください。此後復爾なことがあれば生けてはおきませんッて」
女が歸ると少年がやつて來たので生は女のいつた通りを少年に話した。さうして、
「子儀まなくてはいけないヨ。あの女は犯すべからざる女なんだから」
少年はいつた、
「へー併し君だけは構はないんですネ」
生はいつた、
「そんなことは無いヨ」
少年は曰つた、
「そんなことが無いのに何うして猥褻話しを君にいつたんです？」

生は答へることができなかつた。少年は曰つた、

「亦り寄語てください。惺々勿作態ョつて、左もないと播揚して歩くョつて」

生が甚く怒つて顔色を變へたので少年は去つてしまつた。

一夕生が獨で座つて居るところへ女が來て笑ひながら、

「我と君との緣はまだ斷れては居ませんョ。天命ですネ」

といつた。生は狂喜で寄りそつた。欵、履の音が藉々と響いた。兩人は驚いて起つた。少年が扉を推して入つて來た。生が驚いて、

「何しに來たんだ」

と問ねると、

「僕は貞節人を覗に來たのサ」

と少年は笑ひつゝ女に對ひ、

「サア今でも人のことを何とか云へるかい！」

女は顔を眞赤にして眉を逆豎て默然として一語をも發しなかつたが、突然上衣を翻て革の袋

から一尺許りの晶瑩た七首を取出した。そして少年が郤走るのを追ひかけて戸外へ出た。四顧に少年の影は渺然かつた。女は七首をとつて空を望んで拋擲た。戛然といふ聲と共に燦した長虹の如な光りがした。忽、一物ドサリと地に墮ちたものがある。急いて燭を携つていつて見ると、それは身首異處た一匹の白狐であつた。生は大く駭いた。女は、

「此が君の變童さんです。妾は固からこいつを怨んで居たんですノ。生けては置かないつて君に寄語ましたのに、不欲生つたんでせう」

といひながら刄を囊に收めた。生は拽ぱつて家に入つたが、女は、

「妖物のために意を敗くしましたから來宵を俟つていらつしやい」

といつて門を出て去つてしまつた。

次の夕女は果してやつて至て綢繆に語らつた。生が、

「あれは何の術だエ」

と詰ねると、女は、

「此れは君の御ぞんじないことです。祕密にして下さい。漏れると君の福ではありません」

と曰つた。又生が結婚しようではないかといふと、

「枕席に侍り、提汲に從つて居るのです。伊が婦でなくて何でせう。業う夫婦ですのに結婚なんかいふ必要はないじやありませんか」

生は曰つた、

「吾の貧乏なのを嫌がつてるんではないのかい？」

女は曰つた、

「君は勿論貧乏です。けれど妾だつて富でせうか。今皆かうやつて一緒に居るのは君の貧しいのをお氣の毒と思ふからですヨ」

そして別れに臨み、

「苟且の行ひは屢々してはいけません。來てよければ妾が來ますヨ。來ては惡いのに強におつしやつても無益ですヨ」

其のちは値つて話をしようとしても女は避けて走て了つた。けれど衣の綻びを縫ふとか炊事をするとか不魯婦ほどであつた。

數月かの後女の母が死んだ。生は竭力り葬らひの世話をした。女はそれから獨居をしてゐた。生は孤寂のだから堅いこゝろを亂すことができるだらうと思つて垣を踰えて忍び入り隔窓に呼んで見たが、ひつそりとして應えが無い。門を見ると空室が扃てあるばかりだ。生は疑つた。女は外に約束したところがあつてそこに往つたのだらうと。夜になつて再いつて見たが亦り同じである。それで佩玉を解いて窓に懸けて家に歸つた。翌日て母さんの所で女に遇つた。外に出ると女は生の後を尾けて來て曰つた、

「君は妾を疑つてるんですネ。けれど人には夫々心づてものがありますからネ。今は告ないので何しても君の疑を解くことができませんが、一つ急に煩爲謀いただかねばならないことがあります」

生は問うた。女は曰つた、

「妾は既う八月なんです。旦晩に臨盆をしなければなりません。併し妾の身が分明でないんですから君のために生むことは産みますが君のために育てることは能ません。密々で母さんにさう告つて乳婦を覓し、世間には螟蛉だとしておけばいゝでせう。妾のことを言つてはいけませ

んヨ」

生は諾して母さんに告つた。母さんは笑つて、

「異哉此女！　聘はうとすれば可ないで、而て兒と私てるなんて」

といつて喜んで女のいふ通りにした。それから一月餘りになつた。女が幾日も出て來ないので母さんが心配して往つて見ると門は蕭々閉寂ある。良久しく叩いて居ると女は髪を蓬のやうに亂し、垢づいた顏をして内から出て來て門を啓け、母さんを入れて又閉めて了つた。室に入つて見ると呱々者が牀の上に居た。驚いて、

「幾時誕れたんだヱ」

「ハイ、三日前でございます」

綳席を捉つて見ると願の豐かな額の廣い男の子だ。母さんは喜んで、

「兒は老身のために孫を育てゝ呉れましたのだネ。伶仃い一身を誰に託せようと思ふのだヱ」

女は曰つた、

「區々心中は老母には掬示あげません。どうぞ夜になつて人の居ないとき兒を抱いていつて下さいまし」

母さんは歸つてから生と話をして異がつたが兎に角夜いつて子を抱いて歸つて來た。幾日かを經た一夜半、女が門を款れて入つて來た。手には革の袋を提げて居る。笑して、

「大事を已ましたから此でお別れ致します」

といふ。故を詢ねると、

「君が母を養つて下さつた御恩は刻々も不去於懷。向に一きりで再はいけませんと申しましたのは牀第で御恩を報ふといふ心ではなく君は貧くて結婚をなさることができないやうですから一綫之續をのこしてあげたいと思つたんです。本は一索に得られると思つて居ましたが不圖ず信水が復あつたものですから、とう〳〵戒を破つて再になりました。今では君の德も既う酬しましたし、妾の志も已う遂げましたから憾はありません」

囊の中の物は何だと問ねると女は曰つた、

「仇人の人頭なんです」

檢ると鬚や髪がグシャ〳〵になつて血糢糊なのが入つて居た。駭いて、

「何したんだ」

と研語ねると女は曰つた、

「向に君にさう言はなかつたのは機密が洩れると可ないとおもつたからです。けれど今では事已成たんですから相告しても不妨ん。妾は浙の人で、父は司馬の官でしたが、仇のために滅ぼされてしまひました。それで妾は老母を負つて逃れいで、隱姓名埋頭頂もう三年になるのです。今迄に仇を報さなかつたのは老つた母が居ましたからで、母が去なると又一塊肉が腹中に出來て復讐の時機が遲れたんです。曩の夜出ていつたのは道路門戸が未だ稔なかつたもんですから訛誤てはいけないと思つて調べにいつて居たんです」

といつて門を出たが、又曰つた、

「生れた兒は善視にしてくださいネ。君は福が薄くて無壽せんけれど、此兒はきつと家門を顯かせますヨ。深更ございますから老母にはお眼にかゝりません。我去矣！」

生は悵然に之くところを詢ねたが女は一閃と電の如に瞥爾間見えなくなつて了つた。

生は嘆惋に立木のごとく立つて居た。魂魄を喪つた人のやうに。

翌日生は母さんにさう告つて嘆み異しむばかりであつたが、三年經つて生は果して卒なつた、子どもは十八で進士となり、祖母さんが老つて終るまで大切に奉侍いたさうである。

(一)左僚に出て居る、遶れあひの事である。

(二)古詩に左手持刀尺右手剪綾羅とあるから刀尺といふのは物さしのことであらう。

(三)莊子に唉吾知之とある、哀み嘆する聲で支那人がよくいふ曖呀の曖は恐らく唉の當て字であらう。

(四)外史に非是求援不欲其以冷語冰人耳といふことが書いてある冷淡な人といふことである。

(五)天祿識餘に北齊許散愁自少不登嬰童之牀不入季女之室とある嬰とは美貌のことである。

(六)惟香祖筆記に昌平紅岸谷に道人があつて戒行甚だ嚴であつたが、一寒い夜婦人が來て宿を求めたのを憐んで入れてやると婦人はいろ〳〵なことをいつて道人を挑んだ。けれども道人は心を動かさなかつた。すると婦人は急に腹が病むといひ出して盆に就て一兒を産み、朝になつてから抱へていつた。道人は其盆の汚物を惡んで淵へ捨てたが、誤つて左の手を入れたら指が皆金色になつた。淵際の砂や石を見ると皆金色になつて居たといふことが書いてある。

(七)杜甫の詩に妾身未分明何以見姑嫜といふのがある。勝手に斯うなつたんですからおつかさんにお眼にかゝるは極りが惡いヲ、ぐらゐのことでは無い。ア、昔の者は假令墮落しても今よりは增しでムつた哩。ゴホン〳〵。

(八)詩の小雅に螟蛉有子蜾蠃負之とある螟蛉といふのは桑に居る小さな青い蟲で蜾蠃といふのは土蜂である。土蜂が桑の蟲を負うて木の穴洞に入り七日で孵化するので養ひ子のことを螟蛉といふのださうだ。

(九)繦とは襁のことである、日本では普通に襁褓と書くが支那では繦といふのは古い字で今では繦(或は繈)を用ゐて居る。孩子を包んで負ふたりなどする切れである。

(十)伶仃は零丁と同じである、李密の陳情表に零丁孤苦至於成立とあり又後漢書に戴良有失父零丁などとある。古は兒が居なくなつたときは紙に其名を書いて竹竿に吊したものだ。其紙が風に吹れて零丁とヒラ〳〵する其樣れな淋しい有樣を聯想し孤兒などの有樣を零丁といふのである。

(十一)小さなこと、史記の管晏傳に出て居る。

(十二)左傳襄二十七年に牀第之言不踰閾とある。第は牀と同じ意味で、古し陳楚では牀を第といつたさうだ。

(十三)司馬といふのは官名で左傳にも晉悼公以魏絳爲中軍司馬とある師團長みたやうなものだらう。

嚔人語

長安の士方棟は有名い才子であつたが、佻脫で禮儀などには頓着しない男であつた。陌上で遊女を見ると輕薄に尾綴てゆくといふ風であつた。

清明の一日前のことだつたが、偶ま郊外を歩いて居ると一つの小さな車に出逢つた、朱の茀、繡りの幰といふ美しい車で、數輩の青衣が欵段に乘つて從いて居た。其うちで小さな驢に乘つて居る婢が絶美容色だつたので稍近よつて覗いてみると、車の幔が洞開て居て中には二八ばかりの女郎が座つて居た。紅粧ひの艶麗さ、今まで暗たことも無い美人である。生は目眩神奪しまつて或先り、或後り、何里かを從ていつた。忽、女郎が婢を車の側に呼び近けて、

「爲妾に簾を垂しておくれ。何處の風狂兒か知れないが頻りに來て窺嗚くんだョ」

婢は、乃、簾を下ろし生を顧つて怒つて曰つた、

「此は芙蓉城の七郎さまの新婦の歸寧で田舍娘とは非同ますョ、秀才覷かないやうにして下さ

い」

言ひ已ると轍の土を掬つて生に颯けた。生は眯して目が開かない。縷して眼を拭ふと草も焉も已う渉かつた。驚疑と思ひながら返つたがどうも目が不快ので人を倩んで瞼を啓けて見てもらふと晴の上に小さな翳が生て居た。經宿になると益々劇しく痛んで涙が止度もなく簌々生る。翳は漸次大きくなつて數日の後には小錢ほどになり右の瞳は旋螺ができた。百樣な藥を用ゐても効がないので懊悶欲絶ると共に頗く自分でも懺悔するところがあつた。で光明經が能く厄を解くと聞いたので一卷をもとめ、人に敎へて貰つて誦で居た。初の間は煩躁しておちつかなかつたが、久しく經つうちに漸次氣が安らかになり。旦晩無事惟趺座して珠數を捻つて居た。かうして一年ばかりすると萬緣が俱な靜かに思はれて來た。一日右の目の下で蠅のやうな小さな聲がした。

「黑漆々で叵耐ん！　殺人！」

左の目の中で應した。

「一緒に出て遊ばう！　そして出此悶氣をしよう！」

で、兩方の鼻の中が蠕々痒くなつたかと思ふと有物孔から出て去つたやうであつたが、久之して返つて來て復た鼻から眶の中に入つた。そして言うた、

「許時園亭を窺なかつたが珍珠蘭が遽に枯瘠死しまつたぢやないか」

生は香蘭が喜で園の中に冬に植る日常に水を漑いで居たけれど失明なつてからは久しく不問て置いたのであつた。で、今此言葉を聞いて、

「何故蘭を憔悴死たのだ」

と細君に問うた。細君は驚いて、

「貴郎何うしておわかりになります」

と詰ねた。生は故を話した。細君が園にいつて驗べてみると花は果して槁れて居た。大そう異がつて靜に房の中に匿れて居ると小さな人が鼻の内から出て來た。大きさは豆ほども無い。熒々然門を出て遠くの方へ見えなくなつたが、俄かに臂を連ねて歸つて來た。そして面へ飛びあがつて丁度蜂螢が穴に投つて行くやうに鼻の穴に入つてしまつた。此な風で二三日過ぎると又左の方で言つた、

「どうも隧道は迂遠くて還往が甚く不便だ。不如自分で門を啓けようではないか」

右で應へた、

「僕の方は壁が厚いから容易でない」

左がいつた、

「僕が闢けて試よう。そして與而俱に出入しようではないか」

さうかうするうちに左の眶の中で抓裂くやうな氣もちがした。有頃して目を開くと几の上の物が豁り見える。喜んで細君に話したので細君が審べて見ると脂膜に小さな竅が破いて黒い瞳が熒々と光つて居た。竅は纔と山椒の實ぐらゐであつたが、越一宿は翳障が盡り消えて了つて瞳が二つになつて居た。但し右の目は旋螺が故の通りであつた。乃知兩方の瞳の人が一方の眶の中に同居することになつたのだ。生は一目眇にはなつたけれど雙目の人に較べれば殊更了了になつたのである。由是は益々自分で檢束け鄉中の人から稱盛德るやうになつた。

(一)日本では遊女といへば娼婦のことであるが此遊女は野に遊女ありと詩經にあるやうなぶら〳〵散歩して居る女のことである。

(二)杜甫の貧交行に紛々輕薄何須數とあるが此場合の輕薄は蕭統の所謂洛陽輕薄子長安遊俠兒或は沈約の所謂洛陽繁華子長安輕薄兒などの輕薄で遊冶郎的の態度をいふのである。若い女を見て「ヨイシ！」などといふたぐひサ。

(三)春分後十五日。

(四)婚人の乘車には顔を見られぬ樣にといふので前後に戸のやうなものをつける。詩の衞風にも翠蔽以朝とある。

(五)蒼韻篇に帛車の上に張るのを幰とすといふことが出て居る母衣のやうなものである。

(六)後漢馬援傳に款段の馬を御するといふことがある。款は緩で、しづかな馬といふ意味である。

(七)詩經に載驅載駆とある。字の如く四頭の馬といふことであるが、こゝでは單に馬と思へばよい。

(八)石曼卿が死んだのち友人に出遙つていふには自分は今仙人となり芙蓉城の城主なのであるが君と一緒に遊ばうと思つて誘ひに來たといつた。けれども友人が承知しなかつたので腹を立て白い驢馬に乘つていつてしまつたといふことが歸田錄に書いてある。

(九)文中子に蒙塵而欲無眯不可得絜とある。眼の中に物が入つて視る事が出來ないといふ字である。

(十)古器評に周の札鈕鐘銘の文磨滅して識るべからず旋螺の狀を作すといふことが書いてある玆では眼球に旋螺の如きくもが出來たといふ意味であらう。

（十一）珍珠闌一名奐子闌、色紫にして蓓蕾珠の如く花穗を爲す香甚だ濃かなりと群芳譜にある。

聶小倩

寧采臣は浙の人であつたが、氣慨に富み廉隅自ら重しとする立派な人で、毎も人に對つて、

「僕には男色も女色もない」

といつて居た。

適、金華といふところに赴つて、北郭の闌若に旅裝を解いたが、寺中の殿やお塔は大そう壯麗であつたけれど、蓬蒿が人を沒すほどに生ひ茂つて、人の行距も無かつた。東と西との僧舍は雙の扉空しく掩ひて人ありとも見えなかつたが、惟南の小舍だけは扃に新らしい鍵がかけてあつた。顧れば本堂の東の隅に拱把の修い竹が植つて居つて、其下に巨きな池があつた。そして野藕が已花て居た。寧采臣は其幽香が意に樂つたのと曾ら學使が按臨た爲めに城内の舍價が昂くなつたので此處に留止る事に決め、散歩などしつゝ僧の歸つて來るのを待つて居た。

日暮である。僧ではなくて一人の士人が歸つて來て雨の小舍の扉を啓けた。寧は近づいて一禮し、さて自分の希望を述べると其人は曰つた、

「此間には主人は無いのです。僕も亦り僑居なんです。斯んな荒落たところで甘しければ旦晩惠敎て戴きませう」

寧は喜んで牀の代りに藁を敷き板を支へて几とし、久客の計をした。

是夜は月が高く澄んで清らかな光りが水のやうであつた。二人は膝を促して本堂の廊下に座り、各々姓や字をのべたが、士人は姓は燕字は赤霞だと自言た。寧は試驗を受けに赴く諸生だらうと思つた。聲音が浙の人のやうでないから詰之と奏の者ですと言つた。語が甚く樸誠である。既而相對詞竭ので別れを告げて歸つて寢た。けれど寧は新居なので久しく不成寢かつた。聞くと舍の北の方で喁々と話し聲がする。家口があるやうだ。起きて北の方の壁にある石の窓から微と窺くと短い牆の外に小さな院落があつて四十餘の婦と、羯た緋を著て蓬首に結つた鮎背な龍鍾した媼さんとが月下で偶語して居た。婦は曰つた、

「小倩は何うして久しく來ないんです」

「ハイ、殆好不來矣」

婦が又曰つた、

「姥々を怨んでるやうなことを言つてやしませんか」

「聞きませんぢや、但意が蹙々てるやうでノ」

婦が曰つた、

「婢子は宜い相識ぢやありませんネ」

言未已に十七八の女子が來た。彷彿艶絶である。媼が笑つて、

「背地不言人ノ。我等兩個で正いま談道て居るところへ小妖婢が迹響もなしに悄と來たのぢ。幸と不訾著短處ヨ」といつて又「小娘子は端好貴中人ぢやノ。老身が男子なら也り魂を被攝て了ふ哩ノ」

女が曰つた、

「姥々が譽めて下さらなければ、阿誰が譽めてくれませう」

婦人や女子が何を言つてるのやら分らぬ。寧は隣の人達だらうと意つてそれぎり聴かずに寢

てしまつた。又許時してから始めて寂りと聲が止んだ。方に睡らうとすると有人寢所に至たやうである。急に起きて審顧ると北隣の女子である。驚いて、

「何しに來たのだ」

と問ねると女は笑りして、

「い、月夜で寢られませんから燕好てお話ししようと思つて參りましたノ」

寧は言葉を正し、

「卿が物議を防ぐのも我が人言を畏れるのも略ぼ同じです。廉恥の道を失足してはなりません」

女は曰つた、

「夜分で知つてる者はありませんヨ」寧は直ちに咄りつけた。女は逡巡しながら復何とか有詞とする。寧は叱つた、

「速くお去りなさい。不然と南舍の諸生を呼んで知らせますよ」女は懼れて戸の外へ退いたが復返つて來て一鋌の黄金を褥の上に置いた。寧は掇つて庭墀に擲きつけて曰つた、

「非義の物を入れると僕の囊橐が汚れる」

女は慚ぢて出ていつた。そして金を拾ひつゝ、

「此僕は鐵石人だこと」

といつた。

詰旦蘭溪の生が一人の僕を携て試驗を俟つためにやつて來て東の廂に寓つたが夜に至て暴かに死んだ。足の心に錐で刺したやうな小さな孔が有つて血が綿のやうに滲んで居る。俱には故が知れなかつた。經宿ぎて僕が死んだ。症が亦同じである。向晩燕生が歸つて來たから寧が質之と、燕は魅だらうといつた。寧は元來抗直い人であるからすこしも意に不在かつた。宵分た。女が復來て寧に曰ふには、

「妾は澤山の人を閲ましたが、まだ君のやうな剛腸した方には逢ひません。君は實に聖賢です。だから本當の事を申しますが、妾は氏を聶姓を小倩といつて十八のとき殂なつたので此寺の側に葬づて貰ひましたが、妖物の爲めに威脅されて賤しいことに追ひ役れ、觀顏しく人に向ふのは實に非所樂たまらないんです。もう寺の中に殺す人はありませんから夜叉が君を殺しに來るかもしれませんヨ」

寧は駭いて免がれる計を求めた、女は曰つた、

「燕生と同じ室に居れば免がれます」

問いた、

「何うして燕生は惑はさぬのです」

曰つた、

「彼れは奇人ですから決して近よりません」

問うた、

「何うして人を迷はすのです」

曰うた、

「妾に狎暱だ人は錐を隱して居て其足を刺します。すると其人は茫つとして迷つて了ふのです。因で血を攝つて妖の飲料に供へますノ。又金を用ゐることもありますが實は金ではなくて羅刹鬼の骨なんです。それを留めて置くと人間の心肝を截取つて了ひますノ。此二つは時と場合によつて用ひます」

寧は感謝して、

「戒備するのはいつですか」

と問ねると、

「明宵です」

と答へた。さうして臨別泣いて曰つた、

「妾は大きな海に墮ち漂ひ、岸を捜しても捜し得ぬやうな身の上です。雲に達するやうな郎君の義氣によつて救はれることが出來るのですから、どうぞ妾の朽骨を甕に入れてお歸りの後ち葬つて下さい。再造の御恩にも不啻ます」

寧は毅然く諾之して葬つてある所を問ねると、

「梢に烏の巣のある白楊を記取えて居て下さい」

と言ひ已り門を出て紛然滅くなつた。

明日は燕生に他出をされてはならぬといふので、早くから詣ていつて邀致し、辰後になると酒饌をとゝのへ意を留て燕を察した。そして同宿の約束をすると燕は、

「僕は寂なのが好きで癖になつてるんだから」

といつて辭つた。けれども寧は聽かない。強に寢具を運んでいつたので燕も不得止に從之して榻を移した。そして曰つた、

「僕は君が丈夫な人であることを知つて良切に傾しく思つて居る。しかし微し考へがあるので今急に足下に話すことは出來ない。幸ぞ篋の襆を翻窺ないやうにして下さい。左も無いと兩人の不利益になりますから」

寧は謹んで受數した。

既而各々寢ることになり、燕は篋を窓にのせて枕に就いたが移時すると雷のやうな鼾をはじめた。寧は寢れない。一更近いころ窓の外に隱々と影がした。ト窓に近よつて中を來窺いた。眼の光りが睒閃と物凄い。寧は慴れて燕生を呼起さうとした時、忽ち篋を破つて出た物がある。絲のやうに輝いたかと思ふと石の櫺を折り。欻然と光つた。そして又卽ち斂つて篋に入つた。其速いことは宛も電の滅するが如くであつた。燕は驚いて起きた。寧は僞睡をして覘つて居ると燕は篋の中から一物取り出し月にすかして臭ひを嗅いだ。白い光が晶瑩する。長さは二寸

許り、徑は韭の葉ぐらゐのものである。既而數重にも包んで仍て破れた篋の中に納め、

「何といふ魅なんだらう。大膽にも篋を壞るとは」と自語を曰つて復臥になつた。寧は太く奇

こと思つた因起きて問ねた。且て見て居たことを告した。燕は曰つた、

「お互に相識た仲だから隱しはしないが僕は劍客なんです。若し石の欄がなかつたら妖は立こ

ろに斃れたでせう。雖然傷は負はしました」

「所縅のは何です」

と問ねると、

「劍です。今嗅で見たら妖の氣があるんです」

と曰ふ。寧が欲觀といふといさぎよく出して見せてくれた。熒々たる小劍である。於是益々

燕を重んじた。明日窓の外を調べると血の蹟があつた。寺の北の方へ出ると荒れた坟が累々と

して居た。そして白楊があつて烏が其の巓に巢つて居た。營謀が既就だので趨裝をして歸らう

とすると燕生は祖帳を設けてくれた。情誼の殷渥いものである。そして破れた革の囊を寧に

贈つて曰つた、

「此は劍の袋で、寶藏ておけば魑魅が近よりませんヨ」

寧が術を授けて貰ひたいと望むと、

「君は信義に富んだ剛直い人だから此術を學ぶことが出來るけれども君は猶富貴の人で道の人

ではない」

といつた。寧は乃で妹が此に葬つてあるからといつて女の骨を掘り出し、衣などの中に飲れ

船を賃つて家に歸つた。寧の齋は野を臨んで居た因齋の外に墳を營へて女の骨を葬り祭祀つて

曰つた、

卿の孤魂を憐れみ　　葬つて蝸居に近し

歌笑相聞こゆ　　庶くは雄鬼に陵されざれ

一瓢漿水の飲　　殊に清旨ならざれども

幸に嫌ふことを爲さざれ

祝り畢つて返つて來ると有人後から呼んだ、

「緩待ください。同に行きますから」

回顧るとそれは小倩であつた。歡喜で、

「君の信義は十死を以ても報ゆることは出來ません。請ぞ御一緒に歸つて姑嫜にも拜謁り、慶御つて頂けば無悔です」

といふ。審諦ると肌映流霞、足翹細筍、白晝の端相の嬌艷さは世にありとしも思はれなかつた。それで一緒に齋に歸り、

「座つて少し待つておいで」と囑けて自分は先きに入つて母さんにさう曰た。母さんは愕然た。時から寧の妻は久しく病氣であつたので母さんが、

「あれに言して驚駭してはいけないヨ」

言次うちに女は已翻然と入つて來て拜伏地下た。寧は曰つた、

「此が小倩でございます」

母さんが驚いて顧へる遑もなく女は母さんに曰つた、

「兒は飄然一身で父母や兄弟に違かり公子から澤被髮膚蒙露覆けたのでございます。執箕帚で以報高義をしたいと存じます」

母さんは婥妁な可愛らしい姿を見て始敢言つた、

「小娘子が吾兒を惠顧さるのは大そう嬉しいことですけれど、止一人の兒で用承祧緒せるのですから鬼を偶にする譯には參りません」

女は曰つた、

「兒は實く二心はないのですけれど泉下人で老母に信ぜられないのは仕方がありません。兒さまとして依高堂て晨昏奉へたいと存じますが如何でございませう」

母さんはその誠を憐れに思つて允してくれた。女は卽で嫂さまに欲拜りませうといつたけれど母さんは以疾といつて辭づたので止たのである。女は卽厨下にいつて母さんの代りに尸羹をはじめたが入房穿戸が熟居れた人のやうであつた。日が暮れると母さんは畏懼之り歸つて寢みといつて牀褥を設らへてやらなかつた。女は母さんの意を窺知て出ていつた。齋の前を過つた。欲入卻退て戸の外で徘徊して居るのが何やら懼がつて居るやうに見える。生が呼ぶと女は曰つた、

「お室の劍氣が畏人のです。向ごろ途中で奉見らなかつたのもそのためです」

寧は已に鞄の囊のためだと悟つて居たので囊をとつて他の室に懸けた。女は乃で入つて來て燈の下に座つた。時が過ぎた。一語も言はない。やゝ久しく斯んな風であつた後ち、

「夜何か讀むかエ」

と問と、

「妾は小さいころ楞嚴經を誦みましたが今では强半忘れて了ひました。浼せんが一卷を求めて頂いて夜分暇なとき兄に正して頂かうと存じます」

寧は諾之した。又座つて默然て居る。二更も盡きやうとしたが不自去い。寧が促すと愀然に曰つた、

「知らない土地に孤魂で居るのさへいやですのに殊ら荒れたお墓が怯いのです」

寧が曰つた、

「齋の中には別に牀寢もないし且に兄妹と雖も離れるやうに注意しなければならないから不」

女は起つた。容顰蹙而欲啼ながら偃蹇足而頻歩で從容に門を出た。そして階を涉つて沒くなつた。寧は窮かに憐んで別の榻に留宿てやらうとも思ふのであつたが、又母さんが嗔るだらう

と思ひかへして止たのであつた。

女は毎朝母さんの所へいつて捧匜沃盥りそれから堂を下つて操作た。母さんの思ふ樣にしないといふことはなかつた。黄昏になると退を告げて寧の齋に來た。そして燭の下で經を誦し、寧が寢ようとする樣子を見てから始めて慘然に去くのであつた。先是寧の妻は病氣でやくにたたなくなつたので母さんの劬は堪へられぬほどであつたが女が來てからは大そう逸になつた。それで心の中では德之と思つて居た。毎日漸々稔んで己の出だ子のやうに親愛がり竟には鬼のひとであることさへ忘れて了つた。そして晩に去らせるのに忍びないので留らして起臥を與にした。女は來た當座は飲食しなかつたが半年ほどして稀飩を啜るやうになつた。母子とも溺愛之がつて鬼のひとであると言ふことを諱つたし人も亦不之辨つた。無何寧の妻が死んだ。母さんは陰かに女を納れようといふ氣があつたけれど子の不利といふことを恐れて居た。女は微窺ひ知つたので乘閑母さんにさう告た「一年餘りも居りますから私しの肝鬲もお分りになりましたでせう。行人に禍をするのが不欲ですから郎君に從いて參つたので、區々も他意はないのです。止公子の光明磊落でゐらつしやるのが天人の欽瞻ところですから、三五年も依贅をして

借て封誥を博くし、泉壌を光やかさうと思つて居るのでございます」

母さんも惡い女でないことは知つて居た。けれど不能延宗嗣らといふことを懼れるのであつた。女は曰つた、

「子女は天が授けるのです。郎君は註福藉で亢宗の子供が三人はあることになつて居ます。あのよのものが妻であつても、それを奪すことは出來ません」

母さんは信じた。そして寧に議した。寧も喜んで早速婚禮の筵を列ね親戚や朋黨を集めて披露をした。或人が新婦を覩せてくれといつたので、女は慨然としていと華やかに粧うて出て來た。一堂の人々は盡く眙めたのであつた。あの世の人と疑ふものはなくて反て仙女ではないかと疑づたのである。是より五黨や諸内眷は咸な贄を持つて賀に來て爭うて逢ふのであつた。女は蘭と梅とを畫くことが善であつたから、一すとした畫を酬答にしたが、それを得た人々は光柔として什襲に藏つて置いた。

一日のことである。窓の前に俛頸て怊悵若失して居たが、忽に、

「革の囊は何處に在りますか」

と問く、

「卿が畏がるから槭をして他所に置いてあるヨ」

「妾は已久しく生氣を受けて居ますから畏くはありません。持つて來て牀頭に挂けて置きませう」

寧が詰其意くと、

「此三日以來心怔忡で無停息ん。きつと金華の妖物が妾の遁たのを恨んで旦晩尋ねて來るんだらうと意ふんです」

寧はそれで革の囊を携て來た。女は反覆して視て曰つた、

この劍は仙將が人を盛つたものです。こんなに敝敗れる迄には幾何許人を殺したか知れません。今日覩てさへ肌猶栗悚します」

乃で囊を牀頭に懸けたが、次日又戸の上に移さした。夜になると燭に對して座り、寧にも寢てはいけないといつた。欻、有一物飛鳥のやうに墮ちて來た。女は驚いて幕の間に匿れた、寧が覩ると夜叉の如な狀の物で、電の目血の口、睒閃と攫拏る勢で前んで來たが、門の所で卻歩

つた。そして久しく逡巡つた後ち漸々と革の甕に近づいて尖い爪で摘み取り、將に爪裂かうとした。ト、忽ち甕に格然たる響きがあつて、簀位の大きさとなつた。鬼のやうなものが恍惚として寧は駭き怪しんだ。女も出て來て恙無かつたことを大そう喜んだ。一緒に甕の中を見ると數斗の清水があるばかりであつた。數年の後寧は果して進士となり一人の男子を設けた。妾を納れてから又二人とも一人づつ男を生んだが後ち皆んな仕官して有聲がよかつたさうである。

(一)禮記の儒行篇に砥礪廉隅といふことが出て居る。廉はかど、隅はすみであるから、砥礪廉隅といふことは、かどをとるといふ意味である。ところで此の場合ではかどをとらぬといふことを善意に解し頑固な四角張つた所謂武士的な人といふ意に用ゐてある。

(二)闕若といふのは寺のことであるが、八釜しくいふと寺といふ字は勅額を賜はつたうへでなければいへぬのであつて、勅額を賜はらぬのは闕若といふのが本當である。

(三)把は拇指と人さし指とで握つた太さであつて拱とは兩手の拇指及人さし指で卷いた太さである。此の場合では長い竹の太いのや細かいのが一叢あるといふことである。

(四)六朝時代には各郡縣に儲を置いてあつた。謂はゞ官營宿泊所であつたらう。爾來旅寓のことを

儲といふやうになつたのである。

(五)大きな一尺ばかりの銀の櫛をさした髪のことで、日本で云へば昔しの丸髷のやうなものであらう。

(六)鮐とは河豚のことである。鮐背とは河豚の脊の黑い斑のことで老人は黑いぶちが澤山出來る。それを鮐背と洒落れて書いたのである。

(七)龍鐘といふ字にはいろ〳〵の出處いろ〳〵な說があるが、此場合の龍鐘は廣韻の龍鐘竹名世言龍鐘謂其年老如竹之枝葉搖曳不自禁持とある意味のもので、要は年老いて竹のやうにヒヨロ〳〵して居ることである。

(八)左傳に禮之加蕪好とある蕪のやうに打とけて睦じいことだ。

(九)再生と同じ意味である。

(十)一更は午後の七時より、二更は九時より、三更は十一時より四更は午前一時より五更は午前三時より五時迄。

(十一)趨はこゝではシユではなくサクとよむ。促すといふ意味で禮記に乃趨刑獄とあるのがそれである。

(十二)昔し黃帝の子の祖といふ人は遊んで歩るくことの好きな人であつたが、とう〳〵道中で死んでしまつたので旅行をする人は門を出るまへに郊野を祭りそれから出發する慣習が生じて來た。それを簡

單に祖幔を設けるといふやうになつたのである。

（十三）昔しは、建築の技術も不充分であつたし農民の生活も單純であつたので百姓などは大概圓るい小家を建てゝ住んで居た。それが遠方から見ると丁度蝸牛の殼のやうに見えたので小さな家のことを蝸居といひ、今になつてもその字を用ゐて居るのである。

（十四）詩の小雅に有母之尸饔とある。尸は主さどること、饔は食物を熟すること卽ち煮燒きをすることである。

（十五）封誥といふのは夫の功によつて妻に位を與へられ或は父母にさへも及ぶことがあるそのことをいふので、泉壤といふのは九泉の下などといふ意味で死んだ祖先までを輝かすといふことである。

（十六）左傳に吉不能充身焉能充宗とある充は蔽ふの意で茲では先祖をかゞやかす樣な子供といふのである。

（十七）昔し宋に闕子といふ男があつた。梧桐の東で石を拾つて來たが寶石だと思ひ十重の櫃に入れ什麗れの幅で包んで大事にして居た。それから大事に藏つておくことを什襲といふのである。

阿寶

粤西の孫子楚は名士であつたが、枝指で、迂訥で、人が誑せば直ぐそれを信じて眞だと思つた。席に歌妓でも居ると遙に見たゞけで卻走て了ふ。知其然た或人が、誘之來て妓に狎々しくさせたら、顏を赧め、頸を徹め、汗を珠々下滴すのであつた。因、一同が大笑ひをして其呆やりした狀を話し傳へ、遂に醜名を癡孫とつけた。

邑の大賈の某といふ翁は王侯と埒しいくらゐの富で姻戚は皆な貴胄であつた。阿寶といふ女が絕世の美人で、切りに良い匹を擇んで居ると知つた大家の兒達は、先きを爭うて禽狀を委めようとしたけれど、皆な翁の不當意んだ。時に孫生は儷を失して居たから、或人が戲れに通媒で見ろと勸めたら、生は殊不自揣にも其勸めに從つた。翁は素より生の名を聞いては居た。而ども貧乏だからと思つた、媒の媼は歸らうとした、と適こり寶に行遇つた。問之、以告、女は戲に、

「渠が枝指を去つたら當歸之」

と曰つた。媼は生に告げた。生は、

「不難！」

と曰つて媼が去つたあと、斧で以て餘計な指をぶち斷た。大い痛みが心に徹つて血が注ぐやうに溢れ死にさうになつた。數日を過ぎやつと起ることが能るやうになつたから、出かけて往つて媼に見せた。媼は驚いて女の所にいつて告すと女も奇つた人だと思つた。そして戯れに癡を去つて下さいといつた。生は聞て自分は決して癡ではないと諫しく辯解したが見て自ら言ひらく由もないので轉念ほした。

「阿寶だつて天人の如な美しさでもあるまいに、何でそんなに氣位が高いんだ」

由是曩の念ひは忽ち冷めて了つたのであつた。

會ま清明の時節に値つた。是日は婦女の出遊くのが風俗であるところから、輕薄な少年達も亦隙を結んで隨て行き、思ひのまゝに月旦をするのである。それで同窓の友人が强に生を連れて行くと、或人が嘲つて、

「一遍可・人を見ようと思ふんぢやないかい」

といつた。生は勿論それが戯言とは知つて居た。けれど女に揶揄はれたので一度は其人を見たいとも思つて居たのであるから、忻然として衆に隨つて物色て歩いた。ト、遙に女が樹の下に憩んで居るのを惡少年等が環のやうに人牆を作つて取卷いて居るのが見える。衆が、

「阿寶だぜ」

といつて趨つて行くと、それは果して寶であつた。審諦之と眞に無雙かたもなき娟麗しさである。少頃の間に人が益々稠合つたので、女は起つて遽かに去つて了ふと、衆は倩を顚倒へして、頭の端から足の先きまでを紛々として狂する如く批評する。其中で生獨りは默然て居たが、衆が他へ適つて回視へると、猶り故の所に癡のやうに立つて居る。呼んでも應もせぬ。群は生を曳ぱつて、

「オイ！　魂が阿寶に隨て去つたんぢやないか？」

といつても答へない。素が訥だから衆も怪しまず、或推之り或挽之りして家に連れて歸つた。そして直ぐに臥床に上せた、終日起きない、醉つたやうに冥なくなつて居る。家の人は魂を失

したのではあるまいかと思つて。野に往つて魂を招いたけれども効がない。拍つて問ねると朦朧り應へて、

「我は阿寶の家に居る」

といふ。悉しく問ひ詰めると又默つて返辭をしない、家人は惶き惑ふばかりで少しも譯が莫解なかつた。

初め生は女の去くのを見て不忍舍ぬ意がすると共に自分の身が從之て行くのを感じたのであつた。漸々衿帶のところに傍ついたが、阿る者もない。遂とう女に從いて其家に歸り、座るにも臥るにも離れなかつた。そして甚だ得意であつた。しかし腹中奇餒を覺えるので一度家門に返らうと思ふが、路が知れないので歸れなかつた。

女は毎々夢に知らぬ人と一緒に寢る。名前を問と、

「我は孫子楚だよ」

と曰ふ。異なことゝは思ふが人に告せることでもないから默つて居た。

生の身體は臥床に横たはつてから三日になつた。休々として今にも澌滅りさうである。家人

は大そう恐し人に託んで一度翁の家に魂を招きに行きたいといふことを告て貰ふと翁は笑つて

「平昔往還をしたこともないのに、何で吾の家に魂を遺れるやうなことがあらう」

といつた併し生の家人が固く哀願するので翁も始めて免して呉れた。そこで巫が故い服と草薦とを持つて翁の家に迎ひに往つた。女は故を訪ねて駭き極まり、他へ往かせずに直ぐと自分の室に導いた、そして魂を迎へさした。巫が生の門に歸つて來ると生は榻の上で已呻いた、既醒た、女の室の香盪什具など何な色をして何な名のものがあるといふことを不爽ず歷と言ふのであつた。女が聞いて益す駭き陰かに其の情の深いのに感心した。

生は牀を離れるやうになつたが、座ても立ても凝と思へて居る、忽々として物を忘れた人のやうだ。そして阿寶のことを伺察くごとに一再遷ひたいと希つて居た、浴佛の節であつたが阿寶が水月寺に香を降しに行くと聞いたので早旦から往つて道左で候つて居た。餘まり一心に見て居たので目が眩み睛は勞れた、その日渉午になつて女は始と至た。車の中から生を見ると、摻かな手で簾を搴げ、凝睇不轉に見詰めるのであつた、生は益す心を動かして尾從て行くと女は忽ち青衣に命けて姓字を詰ねさした。生は殷勤に自分でさう展つたが、魂は益搖つくので

あつた、車は去つてしまつた、生は始と歸つて來たが、歸ると復病氣になつた。冥然して食事もせず、夢を見ては寶の名を呼ぶ。そして毎自分の魂が復び靈驗の無いのを恨むのであつた。所が生の家に舊くから養つて居た一羽の鸚鵡が突然斃だ。小兒が牀の所でそれを持つて弄にして居るのを見て生は、

「倘自分の身が鸚鵡になることが出來たら翼を振つて女の室に達るがなア」

と心で注に想つて居た、と身が翩然と鸚鵡になつたから忽ち飛んで去つてしまつた。直に女の室に達た。女は喜んで鸚鵡をつかまへ、肘に鎖をつけ麻の子で飼つて置いた。すると鸚鵡は叫んで曰つた、

「姐々鎖をつけてはいけません、僕は孫子楚ですヨ」

女は大さう駭いて縛を解いてやつたが逃げ樣ともしない。女は祝つて曰つた、

「深いお情は心に篆んで居りますけれど、今や已人と禽と類が異ふんですから、圓く婚姻をすることは出來ないぢやありませんか」

鳥は云つた、

「近芳澤が得て於願已足ですヨ」

そして他人が餌をやると食はないが女がやれば食ふ、女が座れば其膝に集る、臥めば牀に依そつて居る、斯ういふ風で三日になつた。女は甚く憐れに思つて陰と人をやつて生を瞰させると生は臥たまゝ氣をうしなつて已三日になるので、たゞ心の頭が冷きらぬだけであつた。女は又祝つて曰つた、

「君が復び人間となることが能たら誓死君に從ひませう」

鳥は云つた、

「我を誑すんでせう?」

女は乃で堅く矢つた。鳥は目を側だて、有所思るやうであつたが、少間して女が双鬟を束ねるために履を解で牀に上ると、蹶ち下りて來て履を銜へて飛び去つた。女は急いで呼んだけれど、已遠くに飛んでいつてしまつた。女は嫗をやつて探らせると生は已に寤めて居た。家人は鸚鵡が繡をした履を銜へて來て地に墮ちて死んだのを見て、共で異がつて居るうちに、生は旋蘇つて履を索すのであつた。衆は故が分らない、そこへ適ど媼が來て室に入つて生に逢ひ、

「履は何處に在つたんです」

と問ねた。生は曰つた、

「是は阿寶が信實を誓つた物なんです。借口相覆い、小生は金諾を忘れませんョつて」

媼は反てさういつた。女は益々奇にして故と婢から情を母さんに泄らさした。母さんは確めたうへでさう曰つた、

「此ひとの才名は惡くはないが、たゞ相如のやうに貧乏なのでネ。何年も選んだうへで如此嬋をとつたといつては顯者から笑はれるからネ」

しかし女は履の故があるから矢つて他へは之ないといつた。そこで翁も母さんも女の言葉に從づた。急いで生に報せると生は喜んで疾が頓に瘳つたのであつた。家に贅しようといつて議すると女が曰ふには、

「婿は久しく岳の處に居るものではありません。況て郎は貧乏です。久しければ益と人に賤まれます。兒は一旦諾之したのですから蓬荊にも甘んじませう。藜藿をも怨みません」

生は乃で親しく迎へて姻禮を濟し、互に世を隔てゝ出逢つたやうに歡んだのであつた。

是からは生の家も盛妝で小は阜になり、頗か財産が增たのであつた。そして生は書物に癡で家人生產を不理かつたが、女は善に居積て他事で生を累はすやうなことはなかつた。三年たつた、家は益す富になつた、と、生が突然消渴を病つて卒でしまつた。女は痛く哭いて眠りも食ひもしない、いろ〳〵勸めたが不納い、夜にまぎれて經れたのを婢が覺つて急に救けて甦へらした、けれど亦り物を食はない、斯うして三日は過ぎた。親類や友達を集めて生を殮らうとすると棺の中で呻き聲がして息が聞える。啓之、復活つたのであつた。自言

「冥途の王樣に見えると平常が樸誠だといふので部曹になつた、すると忽ち人が來て孫部曹の妻が將に至りますと白しあげた、王樣が鬼錄を御覽になつて言はれた『此れは未だ死ぬんぢやない』すると又白しあげた『三日も食べずに居るのでムいます』王樣がこちらを顧て『汝の妻の節義を感じ始賜再生る。因、馭卒に馬を控かせて汝を送り還へす』ト謂はれた」

それから體が漸平くなつた。大比の歲が來て試驗場に入る前であつたが、多くの少年たちが生を玩弄にして隱僻してある試驗の七課題に擬らへたものをつくり、生を人の居ない處に引ばつて行つて語した、

「これは某家の關節によつて得たんだが、敬んで祕密に授けるよ」

生はそれを信用して日夜揣摩つて七藝を制成へた。衆は隱に笑つて居たのであつた。時に試驗を與どる役人が熟れた題では先の人の蹈襲をしていかんと慮へたので力めて反常經た題紙を下した。それが七首とも皆な生の考へたのに符合て居た。生はそこで魁に擢ばれた。明年進士に舉げられ詞林の官を授けられたが、上が其の異たことどもを聞かれお召になつて問ねられた。生は謹んで啓奏げた、上は大さう嘉悅になり、即阿寶を召されて拜謁を仰せつけられ常賚を有加焉たのであつた。

(一)司馬懿が戰さをしやうと思つて孔明の樣子を偵察したら、孔明は綸巾羽扇從容自若として三軍を指揮して居たので司馬懿は惑心し諸葛君は眞に名士と謂ふべしであるといつた。こゝでの名士は眞逆孔明ほどの名士ではないが兎に角名の賣れた人といふことである。

(二)左傳照之元年に公孫黑又使强委禽とある。昔しは結納に雁を用ゐたので委禽といつたのである。

三)疃人語の註にあり。

(四)後漢の許劭といふ人が毎月朔日に鄕黨を品評したので人の品評することを月旦といふのである。

(五)可人とはよき人といふことで蘇の雜記に見えて居る。

(六)前漢昭帝紀に發郡國惡少年とある、不良少年のことである。

(七)浴佛節とは四月八日の灌佛會のことである、日本では甘茶を灌ぐが實は五香の水を灌ぎ降すのである。

(八)史記に黃金百斤不如得季布一諾とある所から黃金にも換へがたき一諾を金諾といふのである。

(九)司馬相如は後には豪い人となつたが若い時は大層貧乏であつて飯が喰へぬところから仲善であつた臨卯の令をして居る王吉といふ人を傾つていつた。すると王吉は相如を大事にして毎朝訪問するのであつた。臨卯といふところは富豪の多い所で、卓といふ人は家内の人數が八百人もあつたし程鄭も亦數百人の家内であつた。此二人が相談して令に大事なお客樣があるやうだから、御馳走をしようではないかといつて招待した。其席で臨卯の令が、さて長兄は琴がお好きださうですから一曲を彈じて下さいといつて琴を彈かした。所が卓に文君といふ娘があつて此頃寡婦になつて居たが音樂が好きであつたから戸の間から窺つて居た。相如は令と心を合せ琴で文君を挑んだら文君は大そう氣に入つて夜分そつと拔け出して相如のところへやつて來た。相如は文君と一緒に逃げて家を持つたが家といつても壁があるばかりのあばら家であつた。文君がこんなに苦しまなくても臨卯にいつて弟から借りればいゝではありませんかといふので二人は臨卯にいつて酒屋を始めたが、文君は店番をして居る相如は犢一つで表で酒樽を流つて居るといふ有樣を聞き卓は恥ぢて外へ出なかつたさうである。

（十）壻が妻の家に居るのは丁度人體に贅瘤あるが如しといふところから略して贅といつたので史記にも淳于髡齊之贅壻也などゝある。

（十一）周禮に三年大比とある。三年目に行はれる登用試驗である。

（十二）權門に賄賂を贈ることである。

（十三）陸判の四にある。

竹　青

魚容は湖南の人で（とのみで談した者は郡や邑を忘れて居た）家が蔡う貧しかつた。文官試驗に落第し歸つて來る途中で資斧が斷絶たけれど行乞くのは羞かしくて出來ず、甚く餓て居るので歩く力はなし、暫く吳王廟（吳王廟といふのは三國時代の吳の虎臣と云はれた甘寧將軍を祀つたもので、楚江の富池鎭の水邊にあるのださうだが、廟の傍への林には數百の烏が棲んで居て、廟前を通過する客船を二三里も前から出迎へ、帆檣の上で群がり噪ぐ、すると船の客人達は水路の平安を守つて下さる吳王の神鴉だといふので、思ひ〳〵に肉を空中に投げ上げる、それを

一つも墜さずに接けて喰ふのがなか〳〵の奇觀ださうだ、吳王廟が江岸にあるといふことゝ、客船が廟前を絶えず來往することが先づ頭にはいつて居ないと、興味が少ないから此註だけは本文中に挿入する）の中で憩んで居た。因て、神樣を拜んで憤懣之詞を訴へ廊下に出て臥つて居ると、一人の人が魚を引去れて吳王に見え、跪いて、

「黑い衣が墜ちましてまた卒が一人缺員になりましたから此男を補充致しませう」と曰しあけた。吳王がお可になる、卽黑い衣を授かる、身に著ける、忽ち化して烏となる、振翼をして出て見ると一群の烏が居たので相將俱になつて飛んで去つた。烏どもは多くの帆檣に分かれ集まり、舟の上の旅客が爭つて肉を拋擲てくれるのを、空中に群りながら接けて食ふのである。それで亦（二）尤效をして居る須臾に果腹くなつたから翔んで樹の杪に棲り大に得意で居た。二三日蹤ると吳王が偶の無いのを憐れに思つて雌を配してくれた。それは竹青と呼ふので、相に愛し合つていと樂しく日を送つた。

魚は食物を取るのに、輙もすると馴れて機をしないから、竹青は恒勸諫めるのであつたが、卒う聽かなかつた。一日兵士が船で過つた。そして魚を彈つたのが胸に中つた。幸に竹青が銜へて去つたから擒まらずにすんだのである。烏の群は怒つて鼓翼をして波を搖つたので、波が湧

き起つて舟は盡な覆へつた。竹青は餌を攝つて來ては魚を哺くんで居たが、魚の傷は甚かつたので、終日で斃でしまつた。忽、夢の如に眼が醒めて自分は廟の中に臥つて居るのであつた。

是より先き、居人は魚の死んでるのを見出したが誰何だか分らない。撫でて見ると未だ冰つても居ないので、不時人を邏察之て置いた。それが今生きかへつたので、訊ねて事情を知り、賈を斂めて送り歸した。

三年の後である。魚は復故の場所を過つたので吳王廟に參詣し、食物を供へ、烏を喚び集めて唱さしてやつた。乃て、

「竹青が如此中に居るならあとに止まつておいで」

といつて祝つたが、食べて已と竝飛んで去つた。竹青は居なかつたのであらう。後ち領薦り歸りに復た吳王廟に謁つて少牢を薦げた。已乃て大な食物を設へて烏の友を饗應し、又同じやうに祝つたのであつた。是夜は舟を湖村に繫いで一宿したが、秉燭方座つて居ると飛烏の如に飄りと落ちたものがあつた。視之則二十許の麗くしい人である。驀然して、

「お別れまをして來無恙乎」

と曰た。魚が驚いて問ねると、

「君、竹青を不識耶」

といふ。魚は喜んで何所から來たかと詰ねた。麗くしい人は曰うた、

「妾は今漢江の神女になつてますから故鄕に歸つて來ることは少なんです、けれど前ごろ烏の使が兩も君のお情けをさう道ました故來て一相聚るのです」

魚は益々欣び感じた。宛ど久しく別れて居た夫妻の如に懽しさ戀しさに勝へなかつたのである。そこで生は與偕に南へ行かうと將る、女は與偕に西へ行かうと欲る、兩謀とも決らずに寢初興ると女は已起きて居た。目を開けて見廻すと高堂の中に巨きな燭が煥煌とかがやいて竟も舟ではない。驚いて起きて來て、

「此は何所なんだ」

と問ねる。女は笑つて、

「此は漢陽なん也。妾の家はとりもなほさず郎の家ではありませんか。南へ往かなければならないこともないでせう」

と曰つた。天漸曉ると婢や媼が紛集つて讌の用意が已設た。廣い牀の上に短い几を隙て夫婦さし對ひで酌むのである。魚が僕の所在を問ねると舟上に居ますと答へた。舟人が久しくは待たないだらうと生が慮すると、女は言つた、

「不妨ん。妾が君のために報をしますヨ」

於是夜日談したり讌をしたりして樂んで居た。そして歸るのを忘れて居た。

舟人は夢が醒める忽漢陽だから非常に駭いた。僕は主人を訪ねて見たが杳として信兆がない。舟人は他へ適かうとしたが纜が結ばつて解けないので遂う僕と共に舟を守ること、なつた。

雨月餘りを積た。生は忽歸りたいと思つて女に謂ふには、

「僕が此に居ると親戚との仲も斷絶てしまふ。且らず嘗は僕と琴瑟の名ばかりで一度も家門を認ないのは奈何だ」

女は曰つた、

「妾が不能往のをそんなに論らないで下さい。縱ひ往けるにしても君の家には婦が有るではありませんか。將何以處妾也の、不如も妾を此に置いて君の別院にした方が可でせう」

生が、道が遠くて時々至ることが出來ないからと恨がると、女は黑い衣を出して曰つた、

「君の舊の衣が尙在ります。如妾のことを念ひ出した時には此を衣れば至られますし、至したら君のために之を解してあげませう」

乃で大に珍らしい肴を設らへて生のために祖餞をした。既、醉つて寢てしまつた、醒めると身は舟の中にある。視之、洞庭の舊の泊り場所で、舟人も僕も俱に在た、相視て大に駭き、往つて居た所を詰ねる、生は故と悵然げに驚りした風を見せた。枕の邊に一つの樸があるのを檢めると女の贈れた新らしい衣や襪や履なぞで、黑い衣も亦り摺んで其中に置いてあつた。又繡をした橐が腰の際に維繫であつて、それを探ると金貲が一杯充ち物ちて居た。於是南に向つて出發し、岸に達いてから舟人に厚の酬をして去らしめた。

家に歸へつて數箇月を經た。苦く漢水のことが憶はれる因潛かに黑い衣を出して著た。兩脇に翼が生えて翕然に空を凌いで飛んで行き、兩時ばかり經つと已漢水に達して居た。回翔ながら低く下つて視ると孤島の中に一簇の樓舍がある。飛び墜りた、婢子が已望見之て呼て曰つた、

「官人が至になりました」

無何竹青が出て來て衆手に命け、生のために黑い衣の結び目を緩めさした。羽毛のきものが劃然と脫げる。手を握つて中へはいつてさう曰つた、

「恰好いところへ來になりました、妾は旦夕臨蓐さうなんです」

生は　戲に問ねて曰つた、

「胎生かネ、卵生かネ」

女は曰つた、

「妾は今では神になつてるんです則、皮も骨も已更つて曩は異ひますヨ」

數日を經てから果して胎生の子供を產んだ。胎衣が厚く裹んで居て巨きな卵の如であるのを破つて見ると男の兒であつた。生は喜んで漢產と名をつけた。三日の後ち漢水の神女たちが服飾や珍らしい物を贈りものとして賀ひに登堂たが、皆な佳で妙く、三十以上の女はなかつた。一同室に入つて榻にむかひ、拇指で兒の鼻を按で、名まへを增壽とつけた。去つてしまつてから生が、

「アレは皆な誰だエ」

と問ねると女が曰つた、

「皆な妾の輩です、末後の藕白を著て居たのが所謂漢皋で佩を解いた仙女なんですよ」。

數箇月して女が舟で送つて吳れた。船は帆や楫を用ゐずに飄然と自でに行つた。陸に抵くと已人が馬を道左に繫いで俟つて居た。生は歸つた、由此は絕えず往來して居たが、數年を經ると漢產は益々秀美になつたので生は大そう可愛がつた。妻の和氏が不育のを苦にして一度漢產を見たいと每想つて居る事情を生が女に告たので女は裝を治へ、父と一緒に兒を歸へしてやつた。それは三月の間といふ約束であつた。歸つて來ると和氏は己出の產んだ子以上に可愛がり、十月餘りになつたけれども返すに忍びないといつて返さずに居た。すると一日暴かに病氣となつて瘠した。和氏の悼痛は欲死である。生は乃で女に告ふために漢水に詣つた。門を入ると漢產は跣足のまゝで牀の上に臥で居る。喜んで女に問ねると女は曰つた、

「君が久しく約束に負いていらつしやるので、妾は兒がなつかしくなりましたから招せたんです」

因、和氏が兒を可愛がつてるといふことを生が述すと、女は曰つた、

「妾が再育るのをお待ちなさい」一年餘りすると女は男と女の雙兒を生み、男を漢生女を玉佩と名づけた。生は遂漢產を携て歸つたが、歲恆に二三度は漢水に往くので不便であるといふところから漢陽に移家た。漢產は十二の歲に郡の庠にはいつた。女は人間には美くしい質の女が居ないといつて漢產を招いて婦を娶らせ、そして始歸してよこした。婦の名は匽娘といつて亦り神女の產れである。後ち和氏が卒だので漢生も妹も告な來て蹣跚して悲んだ。葬式が畢でから漢產は家に留り、生は漢生玉佩を携れ去つたが、此れからは返らなかつた。

(一)左傳の僖公二十四年に尤而效之とある人の非行を尤めつゝ自分もそれに效ふといふことである。

(二)壯子の逍遙遊に腹尙果然たりとある。腹がくちく滅つて居ぬといふこと。

(三)少牢とは羊と豚を供へること。

(四)列仙傳に鄭交圃といふ人が漢皐で二人の仙女が大きな兩つの珠を佩て居るのを見てそれを下さいといつたら仙女は解いて鄭に與へた。鄭は少し歩んで振向つて見たら仙女の姿は見えなかつた。そして珠も矢張りなくなつてしまつたといふことが出て居る。

(五)禮の檀弓に蹣跚哀之至也とある。蹣とは心を搾つて哀しみ踊とは足ずりして哀むのである。

嬰寧

王子服は莒の羅店の人であつた。早く父を喪つたが、絕う慧で、十四で泮に入つたほどであつた。母さんが最く愛之がつて、尋常には遊郊野などさせなかつた。蕭氏を聘つて配偶せるつもりであつたのが、未嫁まへに夭したので、求鳳が未だ就ずに居た。

上元の節であつた。舅氏子の吳が邀へに來て同に眺矚したが、村外れまで至たとき、舅の家の僕が吳を招びに來て連れて去つた。王は遊女が雲の如に居るのを見て輿に乘せて獨で遊び歩くのであつた。

女郎があつた、婢を携れ一枝の梅花を撚びながら歩いて居た。其の容華は絕代で、笑ふ容子など手にも掬みたいほどの愛嬌であつた。生は注目不移て竟には顧忌れるのさへ忘れて居た。女は數武か過てから婢を顧へつて、

「個の兒郎の目は灼灼して似賊みたいネ」

と曰つて花を地上に遺やり、笑ひながら去つてしまつた。生は花を拾つたが、悵然と神魂の喪失た人のやうになつて怏々く返つたのであつた。

家に至た　生は花を枕の底に藏つて垂頭て睡たまゝ、話もしないし食べもしない。母さんが憂之して醮禳をさせるけれども益々劇くなるばかりで肌革銳減た。醫師が診察して劑を投て病氣を發表すと、忽々として迷つたやうになつた。母さんが所由を撫問ふけれど、默然として答もしない。

適ら吳が來た、母さんは吳に密で詰之てくれと囑んだ、吳が榻の前に來ると生は吳を見てほろほろと涙を下した。吳は榻の傍に近つて慰解ながら、漸々詰研語てみると、生は具く事實を話して謀畫してくれと求んだ。吳は答へた、

「君も亦復癡けて居るではないか、此な顏は有何難遂サ。當い、君に代つて訪之てみやう、徒歩於野をするほどだから必と世家ではあるまい。如しまだ嫁がしてなければ固事は諧るし、不然には重な賂を拌れば必と計は遂げられるサ。但得疼瘳りたまへ、この事は僕が成功させるから」

と曰つた。生は聞いて不覺解顏したのであつた。

吳は室を出て母さんに告づた、そして女子の居里を物色した、而ど探訪既窮しても蹤跡が無いので母さんは大そう憂して無所爲計た。然し吳が去つてから生の顏色は急に開なり、食も漸々進むのであつた。

數日の後ち吳が復やつて來た。生が謀したことは何うだらうと問ねると吳は紿していつた、

「已得之んだ、僕誰何人と以爲たら、我の姑氏女卽ち君の姨妹行なんだ。今尙聘を待つてるんだから內戚で結婚する嫌ひはあるが、實を告へば、諧らないことは無いんだ」

生は喜を眉宇に溢れさして問いた、

「何里に居るんだい」

吳は詭て曰つた、

「西南の山の中で去此三十里可なんだ」

生は又再四付囑んだ、吳は銳身自任て去つた。

生は由此飲食が漸々加て日に日に就平復てゆくのであつた。枕の下を探つて視ると花は枯れ

ては居るけれど、未だ凋落てはしまはない。凝と思へては其人を視るやうに把玩んだ。吳が來ないのを怪におもつて折柬で招之けれど吳は用事に託けて不肯赴召た、生は恚怒つて悒々と歡まない、母さんは復病氣になるだらうと慮つて婚姻の議を急いだ。そしてちよつと與商搉してみると首を搖つて不顧い、惟每日吳を待盼て居る、けれど吳は迄に耗をしなかつた。生は益々吳を怨恨んだがやがて轉思した、三十里は遙い道ぢやない、何に他人を仰息まないでもよいト、それで梅の花を袖中に懷れ負氣して出て往つた、而し家の人は知らなかつたのである。

伶仃として獨で歩いた、程を問くこともできないから但南山を望て行くのである。約三十里餘りも來ると山は亂れて合沓なり、翠は空しく爽肌で、寂として行く人も無く、止だ鳥の通ひ路があるばかりだ。遙に谷底を望むと花の叢、樹の亂れの中に、隱々と小里落があつた。山を下りて村に入ると、舍宇は多くも無い、皆な茅屋だけれど甚う修雅だ。北向きの一つの家は門前が皆な綠柳で、牆の內には桃や杏が猶だ繁であつた。そして其の間には修い竹があつて、野鳥が中で格磔と鳴いて居た。

生は園亭だらうと意つたので敢遽には入らなかつた。四顧くと戶の對に巨きな、滑々した、

潔かな石があつたので、それに據座つて憩んで居た。俄、牆の內で女子が、

「小榮！」

と長く呼んだ、嬌かしい細い聲であつた。聽てる間に一人の女郎が東の方から西の方へあるきながら、杏の花の一朶を執り、俛首いて簪にしやうとした。が、ふと頭を擧げて生を見ると、遂復それを簪にはせずに、含笑して花を撚りながら入つてしまつた。審視之上元の節に途中で所遇た女であつた。心は驟に喜んだ、けれど念へると階進が無い、姨さんの氏を呼ばうかとも思つた。而し從で還往をしたことが無いのだから訛誤へる懼れがある、といつて門內に問ぬべき人も居ない、仕方がないから朝から日の晷るまで座つたり臥になつたり徘徊たりして居た。盈ち盈ちて居た望みが絕えかけたので飢渴のさへ忘れて了つたのである。時々女子が半面を露して窺きに來るのが見えた。不去のを訝んでる如に、

忽、一の老嫗が杖に扶つて出て來て生を顧て曰つた、

「何處の郎君です？　聞けば辰時から來て至於今おいでなさるさうだが、愈將何爲です？　飢くはありませんかの？」

生は急に起がつて揖之をして答へた、

「親類を盼うと思つてるんです」

媼さんは尊驥るいから聞えなかつた。生は又大きな聲で言之つた。乃と、

「貴戚は何といふ姓です？」

と問ねた。生は答が不能かつた。媼さんは笑つて、

「姓名を知らずに何うして親類が探ねられよう、覗うけるところ郎君は書癡ですネ、不如我に從て來て粗糲でも啖はつしやれ、小な榻でも足臥ませうで明朝歸つて姓氏を詢ね、再來て探しても晩くはありますまいに」

生は方ど腹が餒て喝べたいと思つて居た所だし、此から漸々麗しい人に近よれるとも考へたので、大そう喜んで媼さんに從て入つた。見れば門の内は白い砌の路で、紅い花がその道を夾み、片々と階しにも墮ちて居た。西へ曲折つて又一つの闕を啓くと、豆棚や花の架が滿庭中である。媼さんは肅客して舍に入つた、籾壁が鏡のやうに光明り、窓の外には海棠の枝が朶れ下つて居る。室の中は茵藉、几、榻など潔かな澤かなもの罔不である。

生は座つた、有人窓の外で隱約と窺いて居る。媼さんが、

「小菜や、速く黍を作へなさいョ」

といふと外で婢子が嗷聲で應した。座が次つてから具く宗閥を展べると媼さんが、

「郎君の外祖さんは吳姓ではありませんかの？」

と曰つた。

「然です」

と答へた。媼さんは驚いて曰つた、

「吾の甥ぢや！　お前の萱堂は我の妹子ぢや！　年來家が窶貧なのと三尺男が無いのとで、遂に音問も梗塞なり、甥が此許に長成して居るのに、尙だ識らずに居たのぢや！」

生は曰つた、

「此に來たのは姨さんを探しにですョ、忽遽て遂う姓氏を忘れたんです」

媼さんは曰つた、

「老身の姓は秦といつて誕育は無かつたんだョ、僅た一人の弱息が存るけれど、亦り庶產での、

その母親が改醮したものだから、我のところへ遣して鞠養さしてゐるのだが、頗亦鈍でない方での、但し教訓は足らんがネ、いつも嬉しげで愁といふことを知らん子だヨ、少頃或拜識ませう」

未幾く婢子が飯を具た。盈握た雛尾などがついて居る。媼さんが勸餐る、食べて已ふ、婢が來て具を歛める、と媼さんが、

「寧子を喚んで來で！」

と曰つた。婢が應をして去つてから良久すると戸の外で隱かに笑ふ聲がした。媼さんが曰つた、

「嬰寧や！　汝の姨兄が此に在ますヨ」

戸の外では嗤々笑不已のを婢が推之て入らしたが、猶口を掩うて居るのは笑ひが過まらないのであらう。媼さんは瞋目んで曰つた、

「有客在つしやるではないか、吃々吃々、何ていふ景象ぢや」

女は笑ひを忍へて立つた。生が揖之をすると媼さんが曰つた、

「これは王郎といつて汝の姨さんの子だヨ、一家で尙も不相識に居て人さまを笑へますか」

生は座つて曰つた、

「妹子の年は幾何なんです」

けれど媼さんには能解なかつたので、生が又言ふと女は復た笑ひはじめた。仰視げられぬほどに。

媼さんは生に謂つた、

「私の教誨が少いと言つたゞらう！　此可見也ヨ、年は已う十六になつてるのに、呆癡で裁で嬰女の如なんだヨ」

生が曰つた、

「甥より一つ下ですネ」

「阿甥已う十七かい、庚午屬馬ぢやないかの」

生は首應之た。又問いた、

「甥の婦は阿誰だエ」

答へて曰つた、

「無之です」

「蜩のやうな才貌で何ぜ十七までも猶だ未聘に居るのだエ？　嬰寧も亦り無姑家なんだヨ、極に相匹敵いのだが惜しいことには内親の嫌ひがあるでの」

生は無語て嬰寧を目注て居た。他醜をする暇もないのである。婢は女に小語いて云つた、

「目が灼灼してますのネ、賊腔がまだ改らないんでせう」

女は又大そう笑つて婢を顧りみ、

「碧桃が開いたか未だか視て來よう」

と曰つて遽いで起ち、袖で口を掩へつゝ、細碎蓮歩で出ていつた。そして門外へ出てから聲を縱して笑ふのであつた。

媼さんも起つたが、婢を喚んで生の樸被を安置さして曰つた、

「阿蜩、易くは來られないんだから、三日や五日は留つていくが宜い、遲々汝を送つてあげるでの、如し幽悶いのが嫌であつたら、舍の後にある小さな園が消遣になるし、書もあるで讀むがよい」

次日舍の後に至つて見ると、果して半畝ばかりの園があつた。毛氈を敷いたやうな細い草が一面に生えて楊の花が毳を撒いたやうに徑に溜つて居た。そして三本檻の草舍があつて其所には花の咲いた木が四合つて居た。生は小歩に花を穿つて行くのであつたが、樹の頭で蘇々といふ聲が聞えるので、仰視ると嬰寧が上に在た、生を見ると狂く笑つて欲墮だから生は曰つた、

「勿爾ヨ、墮るヨ」

女は且つ下り且つ笑つた。自分でも笑ひが止まらないのだ。方將地に及うとしたとき、失手つて墮ちた、乃、笑ひが止まつたのである。生は女を扶け起したが陰り腕を挾へたので女の笑ひが又作つた。樹に倚りかゝつたまゝ歩くこともできない。良や久しくしてから罷んだのである。

生は女の笑ひが歇まるのを俟ち、袖中の花を出して示之た。女は接之て曰つた、

「枯れてるワ、何で之なものを留とくの？」

「此は上元の節に妹子が遺てたんだから存ておくのサ」

「存とくのは何ういふ意味なの？」

「愛して忘れないことを示すためにサ、上元に相遇てから凝思んで疾になり、自分でも化爲異物かと思つたが、圖らずも見顔色が得たんだヨ、幸垂憐憫つておくれ」

女は曰つた、

「大細事ですワ、至戚なんですもの、何で靳惜ませう、待つてらつしやい、兄が行らつしやる時、老奴を喚んで一巨細折つて負して送つてあげますワ」

生は曰つた、

「妹子癡ちやないか」

女は曰つた、

「何で癡でせう」

生は曰つた、

「我は花を愛してるんぢやない、花を撚ぶ人を愛してるんだヨ」

女は曰つた、

「戯孳の情として愛するのは言ふまでもないことですワ」

生は曰つた、

「我の愛といふのは瓜葛の愛ではない夫妻の愛のことだヨ」

女は曰つた、

「異つてますノ？」

「夜共枕席るのサ」

女は俛むいて良久思案して居たが、

「我、不慣與生人睡のヨ」

語未已に婢は潛りやつて來た。生は惶恐て遁去つた。

少時して母さんの所で會つた。母さんが、

「何へ往つて居たんだエ」

と問ねると女は、

「園の中で共に話して居たんです」

と答へた。媼さんは曰つた、

「飯が熟てから已う久しくなるのに、何んな長話があつて乃爾に嘲嘘して居たのぢや」

女は曰つた、

「大哥が我に共に寢……」

生は大く窘しがつて目瞪した。女は微笑して止た。幸せにも媼さんには聞えなかつたので猶ほ絮々と究詰るのであつた。生は急いで他の詞で掩之した。因、小語で女を責めると女は曰つた、

「此語を不應說の？」

生は曰つた、

「あんなことを語のは人に背くといふもんだヨ」

女は曰つた、

「他人に背いても老母には豈も背かれないワ、且に寢るのは亦常事だから何にも諱さなくてもいゝでせう」

生は女の癡してるのを恨に思つたが悟らせる術がなかつた。

食事が方と竟つたときである。家中人が双の衞を捉つて尋ねて來た。是より先き生の母さんは生を待つて居たけれど久しく歸らないので疑ひはじめた。村中を幾遍も搜覓さしたけれど竟無蹤跡かつた。因、吳のところへ往つて尋ねた。吳は曩に言つたことを憶ひだし、西南の山に往つて覓ねよと敎へた。で、凡と數の村を歷て始と此まで來たのである。

生は門を出ると適り迎ひの人に相値たのである。便、入つて媼さんに告づた、且て女と偕同に歸りたいといつた。媼さんは喜んで、

「我がさう有志るのは匪伊朝夕ことなのぢや、但ど賤は遠涉が不能のだから甥が妹子を携れて去つて阿姨を識認らしてくれゝば大そう好い都合だヨ」

と曰つて嬰寧を呼んだ。寧は笑ひながらやつて來た。媼さんは曰つた、

「何んな喜しいことがあつて笑ひが輙不輟のだらう、笑はなければ當爲全人だのに」

因、怒之以て曰つた、

「大哥が汝と同に去かうといふのだから裝束をなされ」

媼さんは又家人に酒や食を餉さして始、寧を送り出して曰つた、

「姨さんの家は田産充裕で冗人が養へるのだから彼に到つたら且て歸るのでは勿いぞヨ、小學、詩、禮を心にとめて好く翁や姑に事へなされ、卽で阿姨の煩にならねばならぬのは汝の爲に良い匹を擇んでもらうことぢやの」

二人は遂に出發した。山の坳みに至て回顧ると、媼さんは猶だ依稀門に倚つて北の方を望めて居た。

家に抵た。母さんは妹麗を睹て、

「誰だエ？」

と問ねた。生は對へた、

「姨さんの女ですヨ」

母さんは曰つた、

「前に吳郎が兒に言つたのは詐なんだヨ、我には姉がないのに何うして甥が得ませう」

で女に問ねると女は曰つた、

「我母さまの出ではありませんノ、父さまの氏は秦ですが沒つた時には兒在襁中でしたから記

憶ては居ないんです」

母さんは曰つた、

「我の一の姉さんが秦氏に過たのは良確だけれど、殂謝てから已う久しいだもの、那で復存てるものかネ」

因、面龐や痣や贅やを細く詰ねると一々に符合する。母さんは又疑つて曰つた、

「是矣、然ども亡つてから已う多年んだもの、那うしたつて復存てるものかネ」

疑に慮つて居る間に吳生が至た、女は避けて室に入つた。吳は故を詢得つて久之は惘然として居たが、忽ち曰つた、

「女の名は嬰寧かい？」

生が然之といふと吳は怪事だと極くさう稱つた。名を知つてる所以を問ねると吳は曰つた、

「秦家の姑さんが去つた後で姑丈さんは鰥居しをして居たが狐に祟れて病瘠て死んだ、其狐が女の子を生んで嬰寧と名け、繃に包んで床の上に臥かしてあるのを、家人は皆な見たのであつた、姑丈が歿んでからも狐は猶だ時々來たが、後ちに天師の符を求めて壁間に黏けたので狐は

遂う女を携れて去つてしまつた、將勿此耶か」

彼此參疑つてると室の中で吃々笑ふ聲が聞えた、それは嬰寧であつたのである。母さんは曰つた、

「此の女も大う憨生だネー」

吳が女に面たいといふので母さんが室に入ると女は猶だ濃く笑つて居て顧もしなかつた。母さんがお出なさいといつて促したので始と極力むで笑ひを忍へた。そして又壁に面つて時を移し、それから出て來た。出て來て纔と一つ展拜をしたかと思ふと翻然して遽いで室に入り放聲大笑つた。滿室の婦女が爲之に粲然たのである。

吳は異を覘極めに往かうといつて柯を執つて村のあつたといふところに尋ねて至つたが、廬舍は全で無い。山花が零落つて居る而已である。吳は姑さんの葬處が彷彿遠くないやうに憶ふのであつたが、墳隴が湮沒つて辨識られないので詫嘆んで返つて來た。母さんは女が鬼ではないかと疑はしく思つたので、室に入つて吳の言つたことを告したが、女は略も駭意かなかつた、又家の無いものを弔うたが、亦り殊して悲意みもせず、孜々に憨笑をして居る而已であつた。衆

も莫之測つた。母さんは少女と同に寢させた、昧爽く省問に來た、女紅を操るのが、精巧絕倫であるが但だ善く笑ふのだけは禁之不可止かつた。然ども笑ひようが嫣然で、笑ひ狂つても娟かさを損さなかつた。それで人が皆な樂しく思つて、隣の女や少い嫁さんたちは爭ひ承迎へるのであつた。

母さんは吉日を擇んで合卷をさせようと思ひはするが、鬼物ではないかと恐したので、日中竊と窺いて見るが形影に少しの異りもない。そのうちに日が至た。華やかな妝をさして新嫁の禮を行はした。女は極く笑しがつて俯きも仰むきも能ないので、遂う禮を罷めてしまつた。生は女が憨癡なので房中隱事を漏洩しはしないかと恐れるのであつたが、女は殊に祕密を守つて一語も道はなかつた。母さんが憂じたり怒つたりして居る毎に、女が至つて一笑ふとすぐ解つて了ふのであつた。奴婢が過をして鞭楚に遭ふのが恐ろしいと、母さんの所に詣つて共に話をして居て下さいと求む。そして罪を得た婢が投見と恒も免されるのであつた。女は花を愛するのが癖に成つて居た。戚堂を遍ねく物色さして、竊に金の釵を典に入れ、佳種を購求めた。數箇月たつた、階から、砌から、藩から、溷から、花ならぬところは無かつた。庭の後の方に

一架の木香があつた、故から西隣の境近くにあつたのである。女は毎も架の上に攀登り、花を摘んでは簪にしたり玩んだりするので母さんが時々遇見ると訶るけれども、女は卒に改めなかつた。

一日西隣りの子が見つけて凝注傾到で居たが女は避れもしないで笑つて居た。西隣りの子は女の意が已う自分に屬つたのだと謂つて心が益す蕩けるのであつた。女は墻の底を指して笑つて下りた。西隣りの子は約束の場處を示したのだと謂つて大そう悅んだ。及昏から往つて見ると女が果して居た……。

ト、錐で刺されるやうな痛さが心まで徹つたので子は大號といつて踣れた。細視るとそれは女では無くて墻の邊に臥れて居た枯木であつた。隣の父は聲を聞いて急いで奔けて來て研問たが呻つてるばかりで何とも言はない。妻が來てから始と實のことを告した。火を載けて枯木の水淋竅を燭して見ると、中に巨きな蝎が有た。小さな蟹の如な奴である。翁は木を碎いて蝎を殺し、子を負つて家に至たが、半夜になると卒でしまつた。隣人は生を訟へ、嬰寧が妖異といふことを訐發いた。邑宰は素から生の才能を仰ぎ慕つて篤行の士であることを稔知つて居たから隣の翁が誣告をしたのだと謂つて將杖責之た。生は翁の爲めに免してやつてくれと乞んだ、それで遂う釋されて歸つたのであつた。

母さんは女に謂た、

「憨狂をするから爾ことになつたんだヨ、早く過を知つて伏憂におなり、邑宰さんが神明た方だから幸せと累に不牽たけれど、設鶻突い官宰だつたら、必と婦女を公堂で質すことに逮たらうヨ、そしたら我兒は何顏見戚里いぢやないか」

女は正色になつて復と笑ひませんと矢つた。母さんは曰つた、

「笑はない人は罔いサ、但時を知らなければならないヨ」

而し女は由是復と笑はなかつた。故逗に對しても亦り終に笑はなかつたのである。然ど竟日戚しげな容をしたことはなかつた。

一夕生に對つて涕を零した。異におもつて問ねると女は哽咽ながら曰つた、

「曩は相從つて日淺つたので言之たら致駭怪れるだらうと恐じて居ましたが、今日では姑さまも郎も皆な過う愛してくださつて無異心んから直にさう言つても或無妨乎とも思ふんですが

ネ、妾は本と狐が產んだんですノ、母が臨去に妾を鬼の母に託んだので、十年餘り相依り、始と今日の身となつたんです、妾には兄弟も無いので特みとするのは君ばかりです、老つた母は寄しい、寂しい、山阿に居るんです、憐れとおもつて合厝つてくれる人も無く、九泉で悼恨で居るのですから、郎が倘し煩費を不惜いお心なら、地下人の怨恫を消してやつてください ネ、女を養つてくれた者ですから、庶ぞ溺棄ておくのに忍びないとおもつてネ」

生は諾之した。然ど墳冢が荒れはて、草の中に迷くなつてやしないかと慮じた。女は但だ、

「慮はありません」

と言つた。日を刻めて夫妻は櫬を輿せて往つたのである。荒烟錯楚た中で女が墓處だといつて指視したところを掘ると果して媼さんの尸を得た。膚革が猶だ存つて居た。女は尸を撫でて哭哀痛た。そして櫬を舁がして歸つて來て秦氏の墓を尋ねて合せ葬つた。是夜生は媼さんが來て謝を稱た夢を見た。寤て述之と女は曰つた、

「妾は夜見ましたヨ、郎君を驚すなと囑たんです」

生が留めておかなかつたのを恨がると女は、

「彼れは鬼ですから、生きてる人が多居て陽氣の勝つてるところに何で久く居られませう」

と曰つた。そして生が小榮のことを問ると女は曰つた、

「是は亦り狐なんです、最う黠なんですヨ、狐の母が留しておいて妾の世話を視させたんです、毎う果餌を攝つて來て相哺んでくれたのですから、德之とおもつて常も不去心で居りますヨ、昨母さんに問ねましたら已うお嫁之つたと云つて居ました」

是歲からは寒食の節に値ふ毎に夫妻で秦氏の墓に登つて無缺に拜掃した。女は逾年子を生んだが在懷抱中から生ぬ人を見ても畏れなかつた。人さへ見れば笑つて大そう母の風があつたと云ふことである。

(一)泮とは禮記の大學在郊天子曰辟雍諸侯曰泮宮の泮で昔し諸侯が鄉射を習はした處をいふのであるが清朝では諸侯がないのだから、こゝでは童試に及第したといふ意味にとればよい。

(二)舅といふ字は日本では夫の父卽ち禮に所謂婦事舅姑の意味にしか用ゐないが支那では母の兄弟卽ち詩の我送舅氏日至渭陽の意味にも用ゐる。玆では兄弟の子卽ち母方の從兄弟のことである。

(三)瞳人語の註に在り。

(四)醮とは僧が壇を設けて祈禱すること、讓とは巫女が異みを逐ひ卻けること。

(五)姑は日本では普通姑の意味に使つて居るが本家の支那では姑の外に父の姉妹卽ち父がたのをばといふ場合に用ゐて居る。茲では勿論後者である。

(六)姨は母の姉妹といふ意と妻の姉妹との兩義がある。こゝでは前者に用ゐてある。

(七)後漢袁紹傳に孤客窮軍仰我鼻息とある。こゝでは他人の鼻息を仰ぎ窺はなくても可いといふ意味である。

(八)伶仃は零丁に同じ、佚女の註にあり。

(九)道が險阻で獸さへ通らぬ、ただ鳥ぐらゐが通ふといふことである。

(十)本草に鷓鴣生江南鳴曰鉤輈格磔とある又李群玉の詩に正穿屈崎嶇又鑪鉤輈格磔とある鷓鴣のやうな鳴き聲をいふのである。(別におしやべりのことにも應用する)

(十一)學問に夢中になつて世事に迂い人のことである。唐の竇武傳には竇氏兄弟皆喜武獨感尙文諸兄甚爲書癡とある。

(十二)禮に客固辭主人肅客而入とある客を進めて入れるのである。

(十三)詩經に終窶且貧とある窶とは貧乏のために禮儀をも缺くといふことである。

(十四)賁冠卿の詩に家計唯餘之尺僮とある。こゝでは俗にいふ男ぎれの意である。

(十五)醮といふ字は酒を供へて神佛を祭るといふ意味にて冠婚の酌といふ意味にも用ゐるが、普通女

子に對して親言の盃をしたとがせぬとかいふ時に使つてある場合が多い卽ち女未だ醮せずといへば女は未だ結婚せぬといふことである。

(十六)禮の內則に雞尾不盈握不食とあるから、雞尾盈握といへば纏にかなつた雛の料理といふ意味である。

(十七)化爲異物とは死して人外の鬼となることである。魏の文帝の書に元瑜長逝化爲異物とある。

(十八)漢書中山靖王の傳に群臣非省覆孚之親云々とある、覆といふのは蘆、孚といふのは蘆の中にある薄い紙で至つて薄い親類といふ意であるが、こゝでは單に親類といふ意味に用ゐてある。

(十九)瓜葛は蔓が纏ひつくものだから親戚が藝のやうにまとふことを譬へたのである。

(二十)清異錄に醫一名衞又名長耳公とある。

(廿一)甥の音はサウ又はシヤウ、日本ではチヒに限り用ゐて居るが支那ではメヒにも用ゆるのである。

(廿二)元史釋老傳に正一天師は漢の張道陵より始まる其後四代の孫を盛といひ來つて信の龍虎山に居る相傳へて三十六代の孫に至り宗演と名づく元十四年に至り世祖既に江南を平らぐるに當つて使を遣はして之を召す至れば卽ち待つに客禮を以てし命じて江南の道敎を主領せしめ仍銀印を賜ふとある。

(廿三)全唐詩話に隋帝が虞世南といふ人を召して勅語を書かして居られたら帝の傍らの司花女袁寶兒が世南を注視て居たので、袁寶兒は怒した鹽をして居ることが多いが今は卿を注視て居るのを嘲ふがよ

いとおつしやつたので世南が學畫鴉黄半未成垂肩彈袖太愁生といつたことがある。

（廿四）一瓢を二つに分ち婿と婦とが各其一片を執つて酒を飲むので所謂婚禮の杯である、禮に合巹而醻とあるのは酒を飲んで心を醻べ安んずるのである。

（廿五）木香は薔薇のやうな木で四月頃花が咲く。清らかな香ひがして花が雪のやうに眞白である。

（廿六）續漢書に度尙爲上虞長政治殿峻明於疑理朝中謂之神明とある神の如くに明らかだといつたのである。

（廿七）孝經に卜其宅兆而安厝之とある、厝とは置くことであつてこゝでは合せ葬むるといふ意である。

（廿八）冬至から百五日を過ぎた日に火の氣を絶つて冷めたいものを喰べる、それを寒食といふのである。

嘉平公子

嘉平の某公子は風儀の秀れた美男子であつた。年は十七八でもあつたらう、郡の學校に入ることになつて童子の試驗を受けに赴つた。偶、公許の倡の門を過ると、門の内に一人の麗しい

人が居た。因、目注之と、女は微笑して點其首たから、公子は喜んで傍に近より就與に話した。

女が、便

「何所に寓居をしてゐらつしやるの？」

と問くから具しく告之した、

「寓中に他の人が居ますか否か？」

と問ねる。

「無居いョ」

と曰ふ。女は

「妾夕間奉訪ますワ、人に知らしては勿使ョ」

と云つた。公子は諾して歸つた。

既暮た。僮僕を排去てしまつて待つて居ると、女は果してやつて至た。自分から、

「小字は溫嫗といふんです」

と言つて且て、

「妾は公子の風流のを慕つて遂う媼さんに背いて來ましたノ、區々之意、終身お奉へしたいと深願めて居るんですワ」

と云つた。公子も喜んで、重のお金を出して相贖をしようと約束した。

此から三兩夜にきつと一度は至るのであつたが、一夕雨を冒してやつて來た。入門ると濕れた衣を解去で諸を桃にかけ、已乃ら足上の韡を脱いで公子に泥塗を去つて呉れと求んだ。そして自分は牀に上り被に覆まつて居るのであつた。公子は韡を視ると五色の絲で文を現した新らしい錦が、沾濡殆盡てしまつて居る。惜之と、女は、

「妾敢て賤な務を相役ようつていふんぢや非ヨ、公子に妾の情に癡なのを欲使知んだワ」と曰つたが、窓外の雨聲が止まないのを聽いて「淒風冷雨滿江城」と吟み、公子に後を續けて呉れと求めるのであつた、が公子は解らないからといつて辭つた。女は曰つた、

「公子は如此な一人ですのに、何乃て風雅の道を知ないノ？　妾に情も興も消さしちまふワ！」

因、肄習ふやうに勸めたので、公子は諾之した。

往來が既頻りなので、僕輩は皆な知つて居た。公子の姉夫に宋といふ人があつた。亦り世家

の子であつたが、其事を聞いて竊と一度溫姬を見せてくれと公子に求めた。公子は言つた、

「女は必と可かんヨ」

ト、宋は僕の舍に隱身れて女の來るのを俟ち、窓に身を伏せて窺之て見たが、顚倒欲狂かへりさうになつて急に闥を排ると、女はツイと起て垣を踰えて去つてしまつた。宋は鬻往殊殷たので贄を脩のへて媼さんのところへ詣つた。そして指名で求之だ。則、果、溫姬といふ女はあつたことはあつた而ど、死んでから已う多年いのであつた。宋は愕然して退つて來て、其事を公子に告づた。公子は始めて鬼だといふことを知つた。而し心では終ても溫姬を愛好て居たのである。夜に至つて宋の言つたことを女に告すと、女は曰つた、

「誠に然ヨ、だけど願へると君は美な女子を欲得と思つてらつしやるんだし、妾も亦り美な丈夫を欲得いと思つてるんですから、各々、遂り、所願足矣りだワ、人間でも鬼でも何論焉ぢやありませんか」

公子は　然　だと以爲つた。

試驗が暴んだので歸つてゆくと、女も亦り從之て來た。他人には見えないで惟公子だけに見

えるのである。家に至た、女を齋に寄めて置いて、公子は獨りで齋に宿つて母家には歸つて來ない。父さんや母さんは變なことだと疑つて居た。

女が歸寧をしたので公子は始めて隱以と母さんに告つた。父さんも母さんも大そう驚いて、公子に絶之と戒したけれど、公子は聽かなかつた。父さんも母さんも深く憂慮して百な術を盡くして騙遣はうとするけれども去かせることが出來なかつた。

一日公子は僕に諭す帖を案の上に載せて置いたが其中には錯謬が多で、椒を菽に訛へ、蓋を江に訛へ、可恨は可浪に訛へてあつた。女はそれを見て其後に、

「(四)何事可浪、花菽生江、有壻如此、不如爲倡」

と書き、公子に告つた、

「妾初め公子が代々世家の文人でいらつしやるので、故で蒙羞ひをして自薦つたんですヨ、虛有其表とは不圖つたワ、貌で人を取ると乃そ母爲天下笑乎ネ」

言ひ已ると沒くなつてしまつたのである。公子は愧かしいとも恨だとも思つたけれど、猶だ女の所題が知らないから、帖を折て僕に示せた。それを聞いた者は語り傳へて笑の種としたの

である。

(一)府立、縣立或は州立の學校に入る入學試驗を童子の試卽ち童試といつて、これに及第すると生員の資格が出來るのであるが試驗科目は先づ四書文二篇と五言六韻一首を課し、それに合格すると更に一篇の四書文、一篇の經文、一篇の聖諭廣訓の默寫をさせるのである。

(二)曲禮に男女不雜座不同椸架とある、所謂衣桁である。

(三)蓋と江とは字の形ちこそ違つて居るが、音は共にチヤンであるから公子はあやまつて謬めたものと見える。

(四)意味は、何んといふ恨けないことであらう。花椒生菽だなんて、斯んな增をもつて居るよりは、まだ倡なして居る方がよい。といふほどのことで、公子の訛へた文字を其儘用ゐて惡くちを書いたのである。

(五)玄宗皇帝がかつて蘇廻といふ人を宰相にしようと思つて、夜そつと宿直をして居た蘇嵩といふものを召して、詔書をおかゝせになつたことがあつた。それで國之瑰寶云々とおつしやつて、更に說明して言はるゝには、蘇廻は蘇環の子であるから父の名は入れて置きたいと思ふが、あとは然るべく直ほして吳れとのことであつた。蘇は汗を流して久しく考へ込んで居たので、餘程立派な詔書が出來たらうと思つて御覽になると、國之瑰寶といふのを國之珍寶と唯一字直ほしてあるのみであつた。皇帝は蘇が退い

たあとで証書を擲げ出して虚有其表耳とおつしやつた。蓋は體が大きく鬚が澤山あつた立派な男前であつたが、みかけ倒しだと考へられたのである。

阿纖

奚山は高密の人であつた。貿易が業であつたから、往々、蒙沂の間を旅行するのであつたが一日途中で雨に阻げられ、所常宿をとる處へ至た及には夜が已う深けて居た。偏ねく肆の門を叩いて見るけれど應をする者も無い。廡下を徘徊いて居る忽、二つの扉が豁と開いて一人の叟が出て來た、便て山を納れてくれた。山は喜んで從之き、蓆を敷いで堂に入つた。堂上には迄で机も榻も無かつた。叟は曰つた、

「我は客人の歸くところが無いのを憐に思うて、故で相容納したので我は實く酒を賣つたり食を沽つたりする者ぢや非ん、家中は無多手指で惟有老荆と弱女だけのが、眠熟矣ましてナ、宿の肴は有ても烹製の無のに苦ますテ、勿嫌に冷で啜つて下され」

言つて已と便入つて往つたが、少頃短い足の牀を以て來て地上に置き、客人を促座すと、又入つて往つて一の短い足の几を携て來た。(二)拔來報往蹉跎して甚く勞つて居るので、山は起座不自安い、曳とめて暫く息ましたのであつた。

少間すると一人の女郎が出て來て行酒して吳た。叟は曰つた、

「我家の阿纖が興ましたの矣」

視之、年は十六七であらう。窈窕な、風致の嫣然な女である。山は少い弟のまだ結婚しないのが有つたので、竊屬意く思つた。因、叟の清貫や尊閥など詢ねると、

「我は士虚で、姓は古と申しますがノ、子や孫どもは皆な夭折して此女だけが賸りましたのぢや、適ど酣睡てをりましたので、不忍攪なんだが、想た老荆が喚起したものと見えます矣」

と答へた。

「婿家は阿誰です」

と問ねると、

「未字しませんぢや」

と答言へた、山は竊に喜んだ。

既而品味が雜〻と陳べられた、所宿具に似て居るやうである。食事が已でから致悲して言曰た

「萍水之人は遂う蒙寵惠ましたネ、沒齒も忘れませんヨ、まつたく翁の緣盛德です、乃〻、敢〻連に、朴魯を陳しますがネ、僕の幼弟に三郎といふのが有つて十七歳なんですが、讀書、肆業、頗り不頑冥のです、欲求援繫になつて下さいませんか、貧賤でも不嫌ければネ」

叟は喜んで曰つた、

「老夫の此の住居も亦僑寓ちやでノ、倘し相託が得るなら便、一廬假て移家て往つたら懸念も無発と思ひますぢや」

山は都を應之した。遂、起つて謝を展ふと、叟は慇懃に安置して去てしまつた。

鷄既唱た。叟は已出て來て客人を呼び盥沐はした。束裝が已でから飯金として酬をすると、固く辭づて、

「一飯の客留ぢや、萬て金を受る理は無ぬ、矧附婚姻を爲たのぢやもの」

と曰つた。既別れたのであつたが一月餘り客をして返つて來ると、去村一里餘りの所で老媼が

一の女郎を携て往くのに逢つた。冠から服まで盡な素のは喪中なのであらう。既に近くと疑が阿纖に似て居るやうである。女郎も亦り轉顧つて居たが、媼さんの袂を把へて不知何畔附耳をした。媼さんは、便と、歩みを停め、山に向つて曰つた、

「君は奚姓ではありません耶」

山は曰つた、

「唯唯」

媼さんは慘然に、

「老翁は敗堵に壓れて死ました、今將ど上墓をする所でござる、家には虛無人でノ、請ぞ少く路側で待つて居て下され、往即還ます也ノ」

と曰つて遂に林の中に入つて去つたが移時て始還つて來た。途は已う昏冥である。遂、與偕に行きながら其の孤弱を道して覺えず哀啼た。山も亦酸み惻むのであつた。媼さんは曰つた、

「此處は人情の不平善ところでナ、孤や孀では難以過度ぬ、阿纖も既う君の家の婦ぢや、此を過すと日が遲れるかも知れんで、不如、早夜に同に歸だら好ござらう」

山は之が可といつた。既に家に至た。媼さんは燈を挑して客人に供へて已、山に謂つた、

「君が將至と意うて儲への粟は都已う糶出ましたが、尙二十石餘り存て居ますぢや、遠方へは莫致之でノ、北の方へ四五里去くと村中で第一門の談二泉といふ者が有りますぢや、是が吾の售主でござるで、君勿憚勞も先づ尊の乘つてこられたので一囊運んで去んで、叩門て告之て下され、南村の古姥が數石の粟を驢つて路用に致しますで蹄噭を驅て來て一致之て下されと但道はつしやれ」

即、囊に納れた粟を山に付した。山は蹇に策つて去たが、戸を叩くと一の碩な腹の男が出て來たので、告以故し囊を傾て先に歸つた。俄と兩の夫が五匹の驢を以つて來た。媼さんは山を粟のある所に引て至つた、乃は窖の中に在つたのである。山が下りて操量執概と母さんは女に收めさせる、傾刻で裝に盈になる、之を付して以去せる、凡そ四遍ばかり同じやうなことを繰り返して、粟は始く盡つたのであつた。既而金を媼さんに授した、媼さんは其中の一人と二匹の畜を留めて置き、治任して東の方へ出發した。二十里ほど行つてから天が始と曙んだのである。一市に至た、市頭で騎て行くのを賃ひ、僕には談づて返してやつた。

既て歸り著いた。山は以情を父母に告した、相見て甚く喜んだのである。即、別第を媼さんの館と定め、吉日を卜んで三郎の爲めに婚姻を完した。媼さんは匳妝を甚備に治へてやつた。阿繼は寡言で怒るなどといふことは少なかつた。或與語も但微笑するばかりである。晝夜績いだり織たりして停晷無かつた。以是で上から下まで悉な阿繼を憐悅するのであつた。阿繼は三郎に囑んで曰つた、

「大伯さんに寄語て下さいナ、再西の道をお過りになつても、吾たち母子のことを勿言で下さいつてネ」

三四年居た。奚の家は益々富になつた。三郎も泮に入つ矣。

一日、山は古の舊隣に宿つた。偶と曩年歸ところが無くつて翁媼の家に泊つたことに談し及ぶと、主人は曰つた、

「客人それは悞ですヨ、東隣は阿伯の別第なんです、三年ほど前に居でる者が輙もすると怪異ものを覩たの故、空廢になつて甚久のです、何で翁さんや媼さんが居て留めませうぞ」

山は甚く訝之つた。而ども未だ深くは信ぜぬのであつた。主人は又曰つた、

「此宅は向に十年も空になつて居て、敢入る者は無かつたのですが、一日第の後の牆が傾いたので伯が往つて視之則、猫の如な巨きな鼠が石に壓られ、尾は在内で猶搖いで居ました、急いで歸つて來て、衆を呼んで共に往つて見る則、已渉矣のです、群は是物が妖ことを爲たん疑と考へました、その後十日餘りして復入つて視驗ましたが、寂として形も聲も無でした、又一年餘してから始めて人が居やうになつたのです」

山は益々奇之に思つた。家に歸つて私に語し、竊新婦は人間ぢや非と疑つて陰ながら三郎の爲めに慮した。而ども三郎は常の如に篤く愛して居たのである。久之すると家中人が紛と相猜議しはじめたので、女も微し察之たと見え。夜三郎に語づて曰ふには、

「妾君に從てから數載の間未嘗稍も失德なことはありませんのに、今の置之は不以人齒んです、請ぞ離婚書を賜さい、君が自で良い耦をお擇びになるのを聽してあげますワ」

因、泣を下すのであつた。三郎は曰つた、

「あたしの區々す心は夙ら知つてる筈ぢやないか、卿が入門てから、家も日々豐になるので、咸な福澤が卿に歸のだといつてるヨ、烏で異な言をいふものが有るものか」

女は曰つた、

「君の無二心は妾豈不知居りますワ、但ど衆の口が紛紜ので秋の扇と捐られ不免ならないのを恐するんです」

三郎は再四慰解て乃で已でしまつたが。山は終も釋なかつた。毎日善撲之猫を求て來て以觀其意のであつた。女は懼れはしなかつた雖も、蹙々不快であつた。

一夕のことである、媼さんが少し惡いからと謂つて三郎に辭らつて省侍之に行つた。天明に三郎が往つて訊る則、室の内は已に空であつた。駭極いて人を四途に出し蹤迹之けれど竝に無消息かつた。中心營々て寢も食も都廢い。而ども父や兄は皆な幸だと以爲て交々慰藉め、續婚を貫はせようと將爲あつた。而三郎は殊く不懌つて一年餘りも俟て居た、音問は絶えて無かつたのである。父や兄が輒れば誚責るので不得已く重の金を出して妾を買つた。然も阿鐵を思ふ心は衰へなかつた。又數年かを經た、奚の家は日漸に貧しくなつて來た、由是咸な阿鐵を憶ふのであつた。

叔弟に嵐といふのがあつた。以故で膠州に至たが迂道をして表戚の陸といふ生の家に宿つた。

夜隣で甚く哀しげに哭て居るのを聞たけれど詰る遇も無く出發した。既ち反に復之を聞たの因、主人に問ねると答へて曰つた、

「數年前寡の母と孤の女とが於是に僦居をしたが、前の月姥さんが死だので、女は獨處をして居る、一線の親もないのだ、是以哀んでる耳」

「何といふ姓だ」

と問ねた、

「姓は古といふのだ、嘗も門を閉て里社と通をしない故、其家世は悉り分らないヨ」

嵐は驚いて曰つた、

「是は我の嫂也」

因、往つて款扉と有人涕を揮つて出て來て、隔扉に、

「我家では男子が無いのです故」

と應へた、嵐は隙窺をして遙かに審之ると、果して嫂であつたのである。便曰た、

「嫂、啓關て下さい、我は叔家の阿遂ですヨ」

女は之を聞くと關を拔て納入した。孤で苦んでる意のうちの凄慘い悲しい懷を訴へるのである。嵐は曰つた、

「三郎兄さんは頗苦く憶念つてるんですヨ夫婦卽もの、乖迕は有りまさあネ。何遂て遠く遁て此なところに至たんです」

那で輿を賃つて同に歸らうとした。女は慘然に曰つた、

「我は以人不齒數い故、母と偕に隱れたんです。今又返つていつて人に依たら白眼を不加もの は無いでせうヨ。如復還つて欲ければ大兄さんと分炊するんですネ。不然ば、行乳藥求死ですワ」

嵐は既歸から三郎に告した。三郎は星夜馳て去つた、夫婦相見て各々涕洟を流したのである。次日三郎は屋主に告づたが、屋主の謝監生は女の美いのを窺て陰に妾に爲ようと圖んで數年も家賃を取らずに居た。そして頻に媼さんに風示すのであつたが、媼さんは絶之つたのである。媼さんが死んだので、窃に幸可謀と思つて居た而が三郎が忽り至た。で房租を通計て以て引留て難せるのであつた。三郎の家は故より豐でなかつたから多の金額を聞て頗く有憂色した。す

ると女は不妨んよと言て三郎を引きつれ倉の儲を視せた。約三十石餘の粟は租を償つて餘りがある。三郎は喜で謝に告つたが、謝は粟を受とらずに故と金を索めるのであつた。女は嘆息して

「此は皆妾身の惡障なんです」

と曰つて遂以情を三郎に告した。三郎は怒つて邑の役人に訴へようとしたが、陸氏は之を止めて粟を里黨に散け、貨を歛つて謝に償つた。そして車で兩人を送り歸したのである。

三郎は實の事を父母に告づて兄と居を折た。阿繻は私の金を出て毎日倉廩を建てさせるのであつた。而も家中には儋石尙も無かつたから共な奇之がつて居たが一年餘り過ぎて驗視る則、倉の中は盈であつたのである。で數年もたゝぬうちに三郎の家は大そう富になつた。而て山は矢張り貧乏に苦んで居た。女は翁や姑を移さして自分で養ふのであつたが、輙れば金や粟をやつて兄さんを周けるのが、狃れては常のことゝなつた。三郎が喜んで、

「嘗へは舊い惡みを不念たと可云ネ」

と曰と、女は曰つた、

「彼は弟を愛して居らつしやるん耳ヲ。且て渠が非ば妾何んな御緣で君を識ませう」

後は亦何の怪異なことも無かつた。

(一)蒙沂の蒙は濟南府のずつと南の方にある蒙陰縣で沂は沂水縣か沂州府か分りませんが恐らくは大きな沂州府の方だらうと思ひます、と川村宗嗣君は知らして吳れた。

(二)禮の少儀篇に毋拔來毋報往とある。拔も報も皆疾走のことである。躒は蹈む蹶は進なり行くの意此では歩き廻はるといふのである。

(三)晉の鍾榮傳に臣愚謂軍官是素族自有清貫とある貫は鄕籍のことである。

(四)晉語に董叔娶於范氏曰將以求援繫也とある。俗に所謂ひつぱつて貰ひたいといふのである。

(五)蹄はひづめ、噣は口である。史記の貨殖傳に馬蹄噣千とあるのは馬二百匹のことである。

(六)量はます概はますかきである。

(七)喪寧の註にあり。

(八)晉の玩籍といふ人は白眼と青眼とを使ひ分ける人であつた。母さんが終なつたとき嵇喜といふ人が弔みに來たら籍は白眼を以て之に對した。喜の弟の嵇康がそれを聞いて酒を携へ琴を挾んで行つたら青眼であつたさうだ。成程甘く考へたものである。

(九)後漢の王允が張讓の爲めに中てられて捕へられた時に諸從事が涙を流して藥を參らせた。すると允は聲を勵まして吾人臣となり郵を君に獲たのであるから當に罪を受けて天下に謝せればならぬのであ

る。豈藥を呑んで死を求むる者ならんやといつて藥盃を投げたといふことがある。此場合では辻褄の合はぬこと、卽ち無益なこと駄目なことゝいふ意味である。

(十)漢書の楊雄傳に家無儋石之儲晏如也とある儋は二石、石は一石である。

瑞　雲

瑞雲は杭州の名妓で色といひ藝といひ、雙ぶものは無かつた。年は十四だつたが、母親の蔡といふ媼さんが客を應せようとすると、瑞雲は、

「此は奴終身の發軔之始なんですから早々では不可ん。價は母さんの由定にしますから、お客は女に擇ばして聽さいネ」

と告白た。媼さんは、

「諾だョ」

と曰て乃で價を十五金と定め、遂毎日客に見えることゝなつた。求見と思ふ客人は贄を出

す。贄が厚ければ一奕の接をし、一枚の畫を酬ゐる。薄ければ一杯のお茶を出す而已である。瑞雲の名前は已久しい噪であつたから、自此といふものは富の商や貴介な人などが毎日接於門のであつた。

餘杭に賀といふ書生があつて、才子の名が夙くから著づて居た。而ど家は僅と中くらゐの貧產しか無かつた。素て瑞雲を仰つて居たが、固より鴛夢を敢擬といふのではなく、亦り微な贄を竭て、冀得一覩芳澤と思ふのであつた。けれど既多くの人に閱て寒酸な自分などは在意まいと竊では恐して居たが、至てから相見て一談てみる及、而も款接殊殷にして良久く座つて語してくれた。そして眉目に情を含み、詩を作つて生に贈つた。それは「何事求類者、藍橋叩曉關、有心尋玉杵、端只在人間」といふのであつた。生は之を得て狂喜んだ。そして、更に何か欲有言とする忽、小鬟が客來と曰つて來た。生は倉卒に別れた。生は既歸から詩の詞を吟玩つて、夢魂縈擾ては思ひ亂るゝのであつた。一二日過ぎた、情不自已なつたので倘鑿て復た往つた。瑞雲は生に接見と良う歡んで、生の移座近り、悄然に、

「一宵之聚ことが能圖ます否」

と謂つた。生は曰つた、

「窮蹙之士なんです。唯、自分を知つてくれた人に對して自分の痴さを獻るほかはないんです。一絲な贄ではあるけれど、あれでも竭綿薄だつたんですからネ。芳しい容に近づくことが出來れば意願足なんですサ。肌膚之親してもらふなんて、何で此な夢みたいな想を持つものですか」

瑞雲は之を聞いて破然不樂顏をした。二人は一語をも交はさずに相對つて座つて居た。

生が久しく座り込んで出ていかないので、媼さんは頻りに瑞雲を喚んで以促之した。乃、生は歸るのであつた。甚く邑々いので、家を罄にしても博一歡うかとも思つたが、更盡たので別れたのである。けれど此情を可奈何できないと籌思ると、熱せた念が却り消えてしまつた。由是は音息も遂絕のであつた。

瑞雲は壻を擇ぶのに數箇月を費した。それで一人も擇み不得當つた。媼さんは頗く恚つて、將强奪之てしまはうと思ひつゝ未發て居た。一日秀才が來て贄を投し、少時座つて語して居たが、便起つて一本の指先きで女の額を按し、

「惜むべし惜むべし」

と曰て去つてしまつた。瑞雲が客人を送り出して還つて來たのを共が視ると、額上に墨の如な黑さの指印が著いて居る。濯つて見ると益々眞ものであつた。數日か過ぎると黑い痕が漸々と濶がつて、一年餘りもしたら連顴微準くろくなつた。見る人は可笑がつて、車馬之跡も絕えてしまつたのである。媼さんは妝飾を斥去て婢と伍にした。瑞雲は荏弱な質で驅使ひに不任かつたから、日益に憔悴へるのであつた。

賀は斯くと聞いて過之てみた。蓬首して廚下に居る姿は鬼の樣な醜くさであつた。そして首を擧げて生を見ると壁の方を面て顏を隱くした。賀は憐れに思つて媼さんに贖を願と言つた。媼さんは許之した。賀は田を貨り裝を傾し、その金で瑞雲を買つて歸つた。門を入ると瑞雲は賀の衣に索まつて涕を攪すのであつた。且て自分では敢て、伉儷とは思つて居なかつた。願ぞ妾媵にしてくれといつて正妻の來るのを俟つのであつた。賀は曰つた、

「人世で重にすべきは己を知つてくれた人である。卿は全盛な時で猶も能く我を知つてくれた人だ。我は豈て衰へた故といつて卿を忘れよう」

で遂、復と娶らなかつたので、聞き知つた人々は共な姍り笑つたのであつた。而ども生の情

は少しも變らずに益々篤くなつたのである。

一年餘り居た。偶蘇州に至くと、和といふ生が有つて與同主人に宿つて居たが、忽と

「杭州に瑞雲といふ有名な妓がありましたが、近は如何してますか」

と問ねた。賀が適人きましたヨと對へると、又、

「何人にです」

と問うた、

「其人は率僕と等じやうな人です」

と曰つた、

「若し君の如だつたら人を得たと可謂です。價は幾許でした」

と曰つた。賀は答へた、

「奇な疾が有つた緣姑が賤く賣るのを從したんです。不然ば僕如いな者が何うして句欄の中から佳麗が買へるものですか」

又問ねた、

「其人といふのは果能く如君否か」

賀は其問き方が異であるの因、反詰之と、和は笑つて曰つた、

「實不相欺がネ、昔し曾て一度其芳しい儀を覩たんです。世にも絶れた姿を持つて而して流落不偶いのを甚く惜しいと思つた故、術でもつて光を晦まし、璞を保存して置いて、才を憐れむ人の眞鑑を待たうと思つた譯なんです」

賀は急がしく問ねて曰つた、

「君は點之ことが能る位ですから亦り滌之ことも能るんでせうネ」

和は笑つて曰つた、

「不能つてことはありませんサ、但だ其人が誠意を以て求むのを須てるん耳」

賀は起つて和を拜し、

「瑞雲の壻といふのは卽ちそれがしなんです」

と曰つた。和は喜んで曰つた、

「天下で唯眞うの才人が多情であることが能るんです。妍しいとか媸いとかによつて念を易へ

ないんです。請、君に從て歸ませう。便て一人の佳人を贈つてあげませう」

遂、與同に返つたのであつた。既ちに家に至た。賀が酒を命け將とするのを和は止めて曰つた、

「先づ法術を行つて治具をする者を令有歡心てやりませう」

即、盥器に水を貯れさせ指を戟にして字を書いてさう曰つた、

「之れで濯へば愈りますからネ、然たら親で出て來て醫人に一遍謝を云はなければいけませんヨ」

賀は笑つて盥を捧げて去つた。そして立つて瑞雲が自分で醜ふのを俟つて居た。見て居ると洗ふ隨手に光潔になつて艶麗さが一く當年の如になつた。夫婦は共に德之がり、同に出て謝を展はうとすると、客は已う渉かつた。徧と覓たけれど覓からなかつたので、殆仙人だらうと意つたのであつた。

(一)離騷に朝發軔於蒼梧兮とある軔は車輪を止めて置く木である。

(二)左傳に夫子爲王子圍寡君之貴介弟也とある介は大の意で詩經の介爾景福の介と同じである。

といふ人が藍さ咽ぐ、たので或家の嫗さんに漿を下さいといつたら嫗さんは女ので航が妻に欲しいといふと嫗

聊齋中の「才」本篇に譯出するのは、「五通」の次に「又」として記載してある續

話なのである。本篇は「五通」を譯してから此の續話を譯すべき筈であるが、「五通」の方は面白味が少く且つ甚だ淫猥であるから茲に其の大要を記すに止め、續話の方を左に譯することにした。

金生は字を王孫といつて蘇州の人であつた。淮安の縉紳の園中に館で、設帳へて居た。園の中は屋中が無多で、花や木が叢雜つて居た。夜既深て僕などが散居てしまふと、孤影彷徨しながら、意緒良苦のであつた。

一夜、二漏も將殘ようとするころであつた。忽、有人指で扉を彈くものがあつた。急問之と

「火を乞さい」

と對へた。館の僮の聲に類て居るので、戸を啓て内之る則、二八ばかりの麗しい者で、一の婢が其後に從て居た。生は妖魅だらうと意つたから甚く悉しく窮詰た。女は曰つた、

「妾は君みたいな風雅な士が、枯寂がつていらつしやるのが可憐だとおもつて、夜露の多いのも不畏に、相與に此良宵を遣しに來たんですヲ。若し其故を言へば、妾も敢て參りませんし、君も亦り敢てお納にはなりませんでせうヨ」

生は又は疑隣りの奔女だらうとおもつたので、喪行檢になるのを懼れて敬に謝之つた。女

は横波で生を覆た。生は覺魂魄都迷て忽ち顚倒不能自主たのであつた。婢は已之と知つた。便云つた、

「霞姑！　我は且去ヨ！」

女は頷之た。既而て呵つて曰つた、

「去ん則お去耳！　雲とか霞とかつて甚得！」

婢は既去しまつた。女は笑つて曰つた、

「遙ど室中に人が無かつたので偖婢從來たノ。無知如此だもんですから遂う小字を君に聞して しまひましたヲ」

生は曰つた、

「卿が如此に深細いから、禍機が有るだらうと懼しますよ」

女は曰つた、

「久當に自に知りますヨ。保つて君の行止を敗るやうなことはしませんから、憂しなくてもよ ございますヲ」

榻に上つて裝束を緩げる。見ると臂上にかけた腕釧は條金で火齊を貫き、雙つの明球を銜め込んだ立派なもので、燭を既滅ふと光りが一室を照した。生は益す駭いた。

事甫畢、婢が來て窓を叩いた。女は起きて釧で徑を照らしつゝ叢樹の中に入り去つた。

自此といふものは一夕として不至ことは無かつた。生は女が去るのを遙から尾ていつたが、女は覺つたと見え、遽く珠の光りを蔽してしまつた。肇さへ見分かぬ昏さだから生は返つた。

一日生は河北に詣つた。笠の帶が斷絕た。風で吹き落されさうである。輙、馬上で笠を按へて居た。河に至て扁舟の上に座つて居ると風が颯いて來て笠を吹き墮してしまつた。生は頗く意自失したのであつた。舟を既渡めてから見ると大い風が笠を飄へして空際に圓轉て居たが、漸々落ちて來たから、手で以て承之とめた。則、笠の帶は已續づて居た。異なことだと生は思つた。

齋に歸つてから女に向つて緬く述した。女は不言て但微哂むだ。生は女の所爲だらうと思つたから、

「卿が果して神人であるのなら明かに相告て以て頗惑を祛つて下さい」

と曰つた。女は曰つた、

「岑寂い中で此なに癡な情人が得て君を破悶るんですワ。妾自分でも惡くは無いと謂ふんですヨ。縱令妾が能爲此としても、亦り愛してるからですヨ。それを苦て致詰難るのは欲見絶とないさるんですか」

生は復と敢言はなかつた。

先是、生は甥女を養つて居たが、嫁にいつてから五通に惑はされた。生は心では憂して居たけれど未だ人には告さなかつた。女と狎暱てから既久しくなるので、肺鬲にあることは無不傾吐た。女は、

「此等小物事家君が能驅除るんです。けれど顧ふと何して情人の私ごとを嚴君に告へませう」

と曰つた。生が計してくれと苦に哀求すると、女は沈思てから、

「此は亦り易く除へますけれど、但親で往かなければ須んからネー。若輩は皆な我の家の奴隷ですから、若し令一指得著肌膚たら、則そ西江でも濯ぐことの不能い恥ですワ」

生は無已に哀求した。女は曰つた、

「當即に何とか圖へておきませう」

次の夕來て告曰た、

「妾、君のために婢を南へ下ましたワ。けれど婢子は弱うございますから誅鄒してしまふことは不能かも恐んヨ」

その次の夜である。方寢として居ると婢が來て戸を叩いた。生は急いで起きて内に入れた。女が、

「何だつたエ」

と問ねると、

「我の力では擒にすることが不能んでしたから宮してしまひました」

女は笑ひながら其狀を問ねた。婢は曰つた、

「初めは郎のお家だと以爲て居ました。既到てから始と其非ことを知つたんです。で增さんの家に至つた比には已う燈火が張いて居ました。入つて見ると娘子は燈の下に座つてらつしやい

ましたが、几に隠つてお寐なさらうとするところでした。我は娘子の魂を欽つて甑の中に覆てしまつたんです。少時すると物が來て室に入りましたが、急に退いて、

「何して生人を得寓んだ」

と曰ひました。けれども審視ると他たことも無い乃、復入つて來ました。我は陽に逃はされた若な風をしてゐますと、彼は衾を啓て入りました。が、又驚いて、

「何して兵器が得有だ」

と曰ひました。私は本い穢はしい物で指を汚すのは不欲だつたんです。けれど緩々して居て變が生ると奈がありませんから、遂急に捉へて闥之してしまふと、物は驚いて噪ながら遁けて去つてしまひました。乃で起きて甑を啓けると娘子はお醒になつた若でした。而、婢子は行つたんです」

生は喜んで謝をいつた。女は婢と與俱に去つた。

その後半月餘りは絶復と來なかつたから、生も亦已絶望てしまつた。歳暮であつた、館を解つて歸らうと欲て居ると、女が忽とやつて至た。生は喜んで女を逆へ、

「期に久しく見棄て居たので、必と何處か獲罪たんだらうと念つて居ました、幸せと絶て終はれたのでも無かつたんですか」

女は曰つた、

「終歳も仲好くして居たんですヲ。分手に一言も不有たといつては、終屬缺事ぢやありませんか。君がお搶帳になると聞いたので、故で竊と來て一告別を申しあげるんですヨ」

生は偕に歸つてくれと請んだ。女は嘆息して曰つた、

「難言之ることですけれど、今別れようとするのですから、情としても昧しては不忍せん。妾は、金龍大王の女なんですが、君と宿分が有つたもんですから、故で來相就んです。婢を江南に遣つたことを合しておかなかつたので江湖では妾が君のために五通を閹割したと言つて流傳しましたのを、家君が聞之て大へんな恥だといつて忿つて妾を賜死としましたノ。幸に婢が以身自任たものですから怒も乃で稍は解りましてネ。婢を以百數と杖つて、妾には一跬歩くにも保姆を從之てあるんです。その投隙て一至たので盡其衷曲も不能んヲ。奈何のネ」

と言ひ已ると別れようとするのであつた。生は女を挽めて泣いた。女は曰つた、

「君、爾なに勿なくてもようございますヨ。三十年の後には復た相聚になれますから」

生は曰つた、

「僕は三十年矣ヨ、又三十年もしたら皤然一老です。何な顏で復お目にかゝれませう」

女は曰つた、

「不然龍宮には白叟は無いんです。且に人生の壽と夭とは、容や貌には關係しませんから、徒求駐顏とする如なことなら、固亦大易んワ」

乃、卷の頭めのところに一處方を書いて去つた。

生は里に旋つた。甥女が異なことのあつたのを言して云つた、

「其晩夢の若に、一人が妾を捉まへて盎の中に塞たと覺ひましたが、既醒則、血が殷く牀褥に著て居て、而て怪は絕なつてしまつたんです」

生は曰つた、

「我が曩河伯にお禱をしたんだ」

それで群の疑ひは始と解けたのであつた。

その後生は六十餘りになつたが、貌は猶り三十許りの人の類であつた。一日河を渡ると、遙かに上流から蓮の葉が流れて來るのが見えた。大きさは席のやうであつた。一人の麗しい人が其上に座つて居たが、近づいてから視るとそれは神女であつたのである。生は身を躍らして蓮の葉に飛び上つた。と、人の姿は蓮の葉と俱に漸々小さくなり、錢の如に至て滅てしまつた。此事は邵弧の話しと一則で、俱に明の季ごろの事であるが、孰が前で孰が後のことか不知い。若萬生が武を用ゐた後で在たなら則、吳には僅た半通だけが遺つて居るわけである。害を爲すに足らぬのは宜のことである。

(一)幟を殴くとか幃を下すとかいふのは昔しの寺子屋式に、學者が子弟を敎へて居るのをいふのである。

(二)昔しは今のやうな時計がなかつたから水時計を用ゐて時間を計つた。宋會要に漏以銅盛水刻節晝夜百刻漏刻之法有水秤以木爲衡衡上刻疏之曰天河其廣長容及箭有四以木爲之長三尺有五寸著時刻更點於天河中晝夜更用之とあるやうに、孔のあいた銅器から水を滴らし其の分量で時間を計つたのである。そして夜を五分し其初が一漏、一漏が二漏といふやうに計算する。だから二漏將に殘せんとすといへば夜の十時頃と思へばよい。

(三)南史中天竺國出火齊珠狀如雲母色如紫金とある。

(四)事甫畢とは簡にして明、極めて要領を得た文字であるが其儘譯出するのは少し都合がわるいから玆にはやがてと譯して置く。

(五)易に家人有嚴君焉父母之謂也とあるが今は多く父のことに用ゐて居る。

(六)韶會に宮利男子割勢とある去勢することである。

(七)昔しは王宮の門番など去勢したものを使用したので閹といふ字を去勢のことに用ゐるやうになつたのである。後漢書に周禮閹者守中門之禁とある。

(八)金龍山聖蹟記に謝公緒會稽諸生居錢塘安溪宋謝太石姪也三宮北行公投茗溪死門人葬其鄉之金龍山明太祖呂梁之捷神顯靈助焉遂敕封金龍四大王立廟黃河之上とある。謝公が死んでから金龍大王となつたのである。

(九)李白の詩に又無大藥駐朱顏とある。こゝでいつまでも若い顏を駐めておくことである。

(十)搜神記に馮爽遭鄉隧首人以八月上庚日投河死上帝署爲河伯とある。

黃英

馬子才は順天の人であつた。世菊が好きであつたが才に至ては尤も甚く、佳種が有るとさへ聞けば必ず之を購ひ、其ために千里でも不憚に出かけて往つた程であつた。一日金陵の客人が馬の家に寓つたが、其人の中表親が北の方には所無種を一つ二つ持つて居ると言したので、馬は欣動こんで卽刻に治裝し從容と金陵に至つたのであつた。そして客人が多方誓求てくれたため兩の芽を得れ、如寶に裹藏て順天に歸つていつた。

途中まで歸つて來ると一人の少年が蹇に跨がり、油碧車に從てゆくのに遇つた。半姿灑落とした少年である。漸々近づいて與に話すと少年は陶といふ姓だと自言た。談言がなか〳〵騷雅だ。因て、馬の來たわけを問ねるから、實のことを告之すと少年は曰つた、

「種には佳ないものは無ん。培溉るのは人に在るのです」

因て、與に藝菊之法を論しあつた。馬は大そう悅んで、

「何へ往んです」

と問ねると、

「姉が金陵を厭りますから、河朔に卜居うと欲んです」

と答へた。馬は欣然として曰つた、

「僕は固貧乏ですが、茅廬でも寄榻は可以ますから荒陋のが嫌でなければ、他へ適なくてもいいぢやありませんか」

すると陶は車の前に趨けていつて姉に向つて咨嘆した。車の中の人は簾を捲上げて話した。乃は二十許りの絶世な美人であつた。弟を顧づて、

「屋は卑くても厭はない而ど、院は廣く宜得のネ」

と言つた。馬は代つて諾之した。遂で輿倶に歸つたのであつた。第の南に荒た圃が有つて、椽が僅た三四本しか無い小さな室があつたが、陶は喜んで之に居つた。そして毎日北の院に過ては馬の爲に菊の治をした。菊の已枯れたのがあると根を拔いて再た之を植ゑたが、活きないといふことはなかつた。

然ど家は清貧い方であつた。陶は毎日馬と共に食飲して居た。而て其家の樣子を察ると不事火い似であつた。馬の妻の呂氏も亦り陶の妹さんを愛して居たので、不時升斗かを餽郵んでやつた。陶の姉さんは小字を黄英といつて雖も善く談をした。輙すると呂の所に過つては與共に綴をしたり績いだりするのであつた。

一日のこと陶が馬に謂ふには、

「君の家も固もと豐ではないのに、僕も毎日以口腹で知交の累になるのを、胡も常だとしては居られません。で、爲今の計としては菊を賣つても亦足謀生と思ふんですがネ」

馬は素い介な人であつたから、陶の言を聞て甚く鄙んで曰つた、

「僕は君が風流の高士であるから能く貧しさに安んじて居るだらうと思つて居たのに、今是なことを論ふのは東籬を以て市井とするものですネ。菊花を辱めるといふものですネ」

陶は笑つて曰つた、

「自分の力で食べるのは貪るのではありません。花を販つて業とするのは俗なことではありません。人は固より苟に富を求めては不可ませんけれど、然し亦務めて貧を求めなければ必ごと

もありません」。

馬が語をきかないので陶も起つて出ていつたが、自是は馬の棄てた枝の殘りや劣種やは陶が悉な掇捨つて去つた。そして由是は復と馬の所で寢たり食べたりしなかつた。招ぶと始と一度は來た。

未幾く菊が開いた。門の囂喧が市場のやうであるので、怪におもつて過つて窺いて見ると、市の人が花を買ひに來つて居る。そして車に載せたり肩に負つたりしてゆくのが道に屬いて居るのであつた。花は皆な異り種で、目所未睹ばかりであつた。心では陶の貪るのが厭だから與絕しようと思つた。而ど、又私かに佳い木を秘して居るのが恨めしくもあつたので、遂う其扉を款つて將就誚讓と思つた。すると陶は出て來て手を握つて曳入れた。見ると荒れた庭の半畝ばかりは皆な菊の畦になつて居て、數椽の外には曠土も無かつた。勵去つたあとには別の枝を折つて揷補てある。畦に咲いて居る蓓蕾で佳妙ないものは罕かつた。而も之を細認ると皆な向に自分が引拔いて棄てゝしまつたものであつた。陶は屋に入つて酒饌を出して來て畦の側に席を設らへ、

「僕は貧乏で清らかに暮すといふ戒めを守ることが能なかつたのです。毎朝幸に微しばかりの資がとれたので、顔足供醉ますヨ」

と曰つた。少間すると房の中で、

「三郎や」

と呼んだ。陶は諾と返辭をして去つたが俄に嘉な肴を獻た。烹飪が良う精い。因、問ねた、

「貴姉は胡で字なさらぬのです」

答へて曰つた、

「未だ時機が至ないんです」

問ねた。

「何時です」

曰つた、

「四十三箇月の後です」

又詰ねた、

「何説です」。

但だ笑つて言はなかつた。歡を盡して始散れたのである。

過宿ぎてから又詣つてみると新たに挿したのが已う一尺にも盈て居た。大そう奇がつて其術を苦求むだ。陶は曰つた、

「此術は非可以言傳のです。且に君は菊で以て謀生をするのではありませんから焉で此な術がいりませう」

又數日か經つた。門も庭も略寂かになつた。陶は乃で蒲の席に菊を包み數車かに捆載て何處かへ去つたが、其歳が盈て春も將半にならうといふ時分になつて始、南の方の異つた卉を載せて歸つて來た。そして都中で花市を設け、十日の間に盡な售てしまひ、復た歸つて菊を藝つて居る。問之ると、去年花を買つた者は其根を留て置いたが、次の年には悉な劣なものに變つて了つた。乃で復た陶から購ひもとめるのであつた。陶は由之日ましに富になり、一年目にはちよつとした舍を建增す。二年目には廣大な厦屋を起るといふ有樣であつた。併し從心に興作をして更うそれを主人には謀しなかつた。漸々と昔日の花畦が盡り廊舍になつてしまつたので、

更に一區りの田を買ひ込み、四周に墻を築いて中には悉り菊を植ゑた。

秋に至と花を載せて何處へか去つたが、春が盡きても歸らなかつた。而て馬の妻は病氣で卒つた。馬は黄英が意屬て居たので、微と人に風示せると黄英は微笑した。意では允許して居るやうである。で惟だ陶の歸つて來るのを俟つ而已であつたが、一年餘りたつけれど陶は竟に歸つて至なかつた。黄英は僕に課けて菊を植ゑた。一く陶の如である。得金が益す商買に合つて居た。それで村外れに二十頃の膏る田を治らせ、甲第は益す壯になつた。忽、東粤から來た客が陶の函信を寄せたので、發之ると、姉さんを馬に歸かしたいといふ囑みであつた。書を寄した日を考へると、卽ち妻の死んだ日である。そしてその園の中で飲んだときのことを回憶すと適ど四十三箇月目に當つて居たから、大く奇に思つたのであつた。書を英に示せて、何所に聘を致ませうかと請問ねると、英は采は受けませんといつて辭つた。又て故の居が陋しいので南の第に居はせようとした。馬を贅にする若である。けれど馬は可なかつた。日を擇んで親迎の禮を行つたのである。

英は馬のところへ適つてから壁間に扉を開けて南の第に通へるやうにした、毎日過ては自分

の僕にいろ〳〵の用事を課けるのである。馬は妻の富であるのを恥ぢて、恒う黄英に囑けて南と北との籍を作らせ、淆亂になるのを防ぐのであつた。而ど黄英は輙すると家に須なものを南の第から取つて來るので、半歳たゝぬ間に家中觸類が皆な陶家の物となつた。馬は立ろに人を遣つて一々それを齎還さした。そして復と取つて來る勿といつて戒めた。けれど浹旬にもならぬうちに又雜つて居た。こんなことを凡そ幾更かしたであらう。馬が煩しさに勝えながつて居るのを見て黄英は笑つて曰つた、

「陳仲子勞れはしませんか」

馬は慙ぢて再と稽べなかつた。そして一切黄英のいふことを聽くやうになつた。で、工人を鳩め材料を庀へ、土木が大に作つたけれど馬は禁めることが能なかつた。數箇月經つと樓や舍か連亙つて南と北との兩方の地が一つに合さり、疆界が分らなくなつてしまつた。然し馬の數へに避ひ、門を閉して復と菊を業にはしなかつた。而ど享用は世家にも勝つて居た。馬は自ら安んじて居ることができず、

「僕の三十年の清德も卿のために累はされてしまつた。斯して視息人間て徒らに於裙帶而食る

といふことは眞く一毫の大丈夫も無い事である。人は皆な富を祝るけれど、自分は但ど貧を祝るのである」

と曰つた。黄英は曰つた、

「妾は貪鄙のでは非せんヨ。但だ少し豐盈にならないと遂には千載下人に、淵明の貧賤骨め百世も發迹なかつたナと謂れますから、故で聊か我家の彭澤の爲に解嘲をしてみたんです。然ど貧乏な者が富にならうと願ふのは難しくても、富が貧乏にならうと求るのは、固亦甚易ことなんです。牀頭にあるお金は君の揮去のに任せて妾は不靳ワ」

馬は曰つた、

「他人の金を捐るのも亦り良醜いことだからネ」

黄英は曰つた、

「君は富が不願ですし、妾も亦り貧乏は不能し、無已れば君の居を析て、清い者は清く、濁つた者は濁つてることにすれば何害んワ」

乃、園の中に茨茅を築らへ、美な婢を擇んで馬に傳かした。馬は之で安心して居た。然ど數

日か過ぎると苦く黄英が念はれるので招之だけれど至るのを肯しなかつた。不得已く反つて就之ていつた。輙、隔宿に至のを常として居た。黄英は笑つて曰つた、

「東食西宿ですネ。廉い人は如是をしませんでせう」

馬も亦自ら笑つて對もできなかつた。遂う復た初の如に居を合せて了つたのである。

會のことであつた。馬は用事があつて金陵に客をして居たが、適ら菊秋に逢つたので、早くから花肆に過た。見ると肆の中には盆が甚煩いほど並べてあつて款りした朶の佳勝たのが咲いて居た。馬は心を動かして陶の製つたのに類て居る疑だとおもつた。少間すると主人が出て來た。それは果して陶であつた。極く喜んで契闊のちのことなど具しく道し、遂うそこに止宿つたのであつた。そして陶に歸れといつて要んだ。陶は曰つた、

「金陵は吾の故土ですから、是で婚禮をしようと思ふんです。薄ばかりの貨が積みたてゝありますから煩でも姉さんへやつてください。我は歳の秒には暫らく去きますから」

併し馬は不聽かつた。歸つてくれといつて益す苦く請んだ。且て、

「家は幸に充盈だから、但だ座つて享て居れば可んだ。復う賈なんか無煩い」

と曰つて肆中に座り込み、僕に價をさう云はせ、廉其直で數日のうちに盡り售つてしまつた。そして陶に逼つて襲裝をさせ、舟を賃つて遂う北へ旅立つたのであつた。我が家の門を入ると、姉は已う舍を除け、牀榻や裀褥なぞ皆な設てあつた。それが豫ら弟の歸つてくるのを知つて居たかの若であつた。

陶は歸つて來て旅の裝を解くと課役つて大いに庭園を修へさした。そして自分は惟だ毎日馬と共に碁を圍んだり酒を飲んだりするのみで、更不復結一客かつた。擇昏さうとしたけれど、不願だといつて辭つた。姉は兩の婢を遣つて寢所に侍らした。三四年居つて一人の女が生れた。陶は素もと酒が豪かつた從ら、沈醉つたのを見たことがなかつた。馬の友人に曾生なるものがあつて、酒量は亦り無對であつたが適ま馬を過れたので陶と相較飲をさしてみた。二人は縱に飲んで甚く歡び、相得るの晩きを恨んだほどであつた。辰の刻から始めて四漏に欽み乾めた。計へてみると各百壺を飲み盡して居た。曾は泥の如に爛醉つて座間に沈醉でしまつた。陶は起つて寢に歸つたが、門を出て菊畦を踐んでゆくうちに、玉山傾倒れ、衣を側に委だすやいなや、地で菊に化つてしまつた。高さは人ぐらゐで十餘朶の花が咲き、皆な拳よりも大きかつた。馬

は駭絶して黄英に告つた。黄英は急いで往つて菊を拔いて地の上に置き、

「胡ぜ醉つて至此つたんです」

と曰つて、衣を覆ひ、馬を要つて俱に去つた。そして戒勿視といつた。既明てから往つて見る則、陶は畔の邊に臥て居た。馬は乃で姉弟が菊の精であることを悟り、益〻二人を敬ひ愛した。

陶は本當の姿を露はしてからは益〻飲みやうが放になつて、恒う自分から折束つては曾を招んだ。因て與莫逆となつた。

（十七）花朝のことであつた。曾が兩の僕に一罎の藥浸白酒を舁かして來造訪た。そして與共に飲み盡さうと約束した。罎の酒が將竭になつたが二人とも猶未甚くは醉つて居なかつたので、馬が潛かに一瓶の酒を入れてやると、二人は又之を飲盡した。と、曾は醉已憊れたので僕たちが負つて去つた。陶は地に醉ひ臥して又菊と化た。けれど馬は見慣れて居るから驚かなかつた。法の如く菊を拔いて旁で守つて居た。變化するのを觀ようとおもつたのである。久しくたつた。葉が益々憔悴へた。大く懼じて始めて黄英に告づた。黄英は聞くと駭いて、

「弟を殺してしまつた！」

と曰つて奔けて視にいつたが、根は已う枯れてしまつて居た。痛絶んで梗を招つて盆中に埋め、それを携つて閨に入り、毎日之に灌漑つた。馬は欲絶に悔い恨み、甚く曾を惡むのであつたが、數日か越てから聞くと曾は已に醉つて死んでゐたのであつた。盆中の花は漸々蔚して九月には既う花が開いた。短い幹に朶が粉あつて之を嗅ぐと酒の香がする。で、醉陶と名け、酒を澆てやるとます〳〵茂るのであつた。

後女は長成つて世家に嫁いた。黄英は終に老つたが他に異つたこともなかつた。

（一）後漢の鄭泰傳に明公將帥皆中表腹心周旋日久とある。中表とは異姓の從兄弟のことである。

（二）書經に使百工營求諸野とある度り求めるのである。

（三）李商隱詩に又建幢車とある。油碧車とは幕を垂れた車のことである。

（四）河北のこと。

（五）陶潛の詩に采菊東籬下とある。こゝでは菊畦を菊市にしようとするのですかといふくらいゐの意味。

（六）續に通ず。

(七)蓓蕾とは花の綻びた貌。

(八)一頃とは百畝のこと。

(九)孟子に陳仲子豈不誠廉士とある。陳仲子とは清廉な變り者であつたのである。

(十)宋時親王南班之壻を西官とも亦裙帶官ともいつたさうである。裙帶官は振つてる。

(十一)淵明が菊を愛したことは人の知るところであるが南史隱逸傳に謂親朋曰聊欲絃歌以爲三徑之費可乎執事者聞之以爲彭澤令とある。

(十二)齊に一人の女があつたが、二つの家から貰はれた。で母さんが女に東の家にゆかうとおもへば左袒するがよいし西の家にゆかうとおもへば右袒するがよいと曰つた。すると女は兩袒して曰つた「東家で食べて西家で宿たいとおもひます。と、東家の聟は醜く西家の聟は賢しかつたのである。

(十三)五通の註にあり。

(十四)南海に骨の無い蟲があつて水の中に居ると活きて居るが水が無くなると醉つて一堆の泥のやうになると五色線にある。又後漢の周澤傳には三百五十九日齋一日不齋醉如泥とある。

(十五)莊子に莫逆於心遂相與爲友とある。

(十六)唐では二月の十五日を花朝といつた。

石清虛

刑雲飛は順天の人であつたが、石が好きで、佳い石を見ると黿の直を靳まなかつた。偶、河で魚を漁つて居ると、有物網に掛つたから、沈んで之を取り上げる則、それは徑が一尺ほどの石で、四面が玲瓏り、峰巒が疊秀つて居る。刑は異珍い寶を獲た如に喜しがり、紫檀を雕つて座とし諸を案の頭に供へて置いた。値天欲雨ごとに孔といふ孔から雲が生て、遙かに望むと新しい絮を塞めた如である。

すると勢力のある某が踵門て求觀といつた。そして既見と取り擧げて健さうな僕に付し、馬に策つて竟去つた。刑は奈こともできない。頓足して悲み憤るのみであつた。さて、僕は石を負つて河濱まで來たが橋の上で肩を息めた。忽、失手つて諸を河に墜してしまつた。勢力家は怒つて僕を鞭ち、卽に金を出して善く泅ぐ者を傭ひ、百計と冥收らしたが、竟う無可見かつた。乃、金を懸けるといふ約束を署して去つた。由是は石を尋ねる者が日々河に盈ちたけれど

遂うそれを獲た者は無かつた。後ち刑は石を落した處に行き、流に臨んで於邑いで居たが、但見れば河の水は清らかに徹で、石は固水中に在るのであつた。刑は大そう喜んで、衣を解いて水に入り、之を抱へて出て來た。紫檀の座が猶だ存て居た。

既歸から不肯設諸廳事、内室を潔めて拱めて置くと一日老叟が款門れて看たいと請んだ。刑が「石は失なつてから已久しくなりますヨ」

と託言と、叟は笑つて、

「客舎にあるんぢや非ん耶」

と曰つた。刑は便で無いことを事實らしくしようと思つて客舎に請じ入れたが既入と石は果して客舎の几の上に陳てあつたので、錯愕て不能言なかつた。叟は石を撫でて曰つた、

此は吾の家に故くからあつたので、失去て已久しいのですが此に在つたのですか。既に見た上は請ぞ還して賜きたいものです」

刑は甚く窘しがつて、遂う石の持主たることを叟と爭ふに至つたのであつた。叟は曰つた、

「既に汝の家の物なら何んな驗證がありますか」

刑は答が不能かつた。叟は曰つた、

「僕は則と故から識之ります。前後に九十二の竅があつて、巨きな孔の中に清盛天石供と云ふ五字があります」

刑は審しく視た。孔の中には果して小さな文字があつた。粟米よりも細かで、目の力竭りに視れば可辨認のであつた。又竅を數へると果して叟の言ふ如である。刑は以對ふことができないので、但執に與なかつた。叟は笑つて、

「誰れの家の物で君を主には、憑んだのですか」

と曰ひ拱手をして出ていつた。刑は門の外まで送つて至つて還つて來る則、石は失所在つて居た。大そう驚いて、叟を疑ひ、急いで追ひかける則、叟は緩くり歩いて居たから未だ遠くは行かなかつた。奔けて去つて叟の袂を牽きとめて哀しむと、叟は曰つた、

「奇ですネ。徑が一尺もあるやうな石を豈て手に握つたり袂に藏したりされませう」

刑は叟が神さまであると知つたので、強に叟之て歸つて來た。そして長跪て請之だ。叟は乃で曰つた、